
GOTOUSAN!! (ゴトウサン!!)

エルドリッジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GOTOUSAÑ!!（ゴトウサン!!）

【著者名】

ZZマーク

【作者名】 エルドリッジ

【あらすじ】

タケル・コウト・マイの中学生3人組が、糺余曲折をへて、最終的に人類を救うという物語。

プロローグ（前書き）

今回初めて小説を書きました。処女作です。これは小説になつていいのだろうか？という不安がよぎつているので、とつつきにいく部分が多くあるかとは思いますが、心おおらかに読んでいただけないと嬉しいです。

読み進めて行くうちに徐々に世界観なり設定なりが分かつていくような感じにしてしまったので、あらすじはあまり書く事ができなかつたのですが、3人がどのような糾余曲折をへて人類を救うことになるのか？その過程を楽しんで頂ければ幸いです。

物語の舞台はほぼファンタジーですが、根底にはSFがあつたりします。その話はまた後ほど。こ。

まだプロローグと1章だけの掲載ですが、徐々に続きを書いていきたいと思いますので宜しくお願ひします。

プロローグ

「なんだ…これは…」

緊張した空気が流れる薄暗い会議室の中、プロジェクターの真正面に座るスーツ姿の男が、映し出されている映像に見入りながら愕然とした表情でそう呟いた。

その男の声に端を発したかのように、同じく映像に見入るスーツ姿の男女が驚きの声をささやいていく。

「そんなまさか…」「なんてことだ…」「信じられないわ…」

映像が流れ終わり、少しの沈黙の後、最初の男がプロジェクターの横に立つ小太りの男にゆっくりと問いかける。

「これは…事実なのか？」

「はい…。確認された時よりあらゆる検証を徹底的に行いましたが…間違いないと…」

「確認したのはいつだ？」

「…半年前です…。」

すると突然別の男が声を荒げ、小太りの男を問い詰める。

「半年も前だと…なぜもつと早く報告しなかった！？」

「も、申し訳ございません…あまりに我々の、これまでの予想や推測からかけ離れた内容だったため、検証に時間がかかってしまい…」

「言い訳はいい！なぜ少しの報告もなかつたんだと聞いている！」

さらに小太りの男を攻め立てるが、また別な男が、先ほどの映像に困惑した表情を残しつつ、一人のやり取りに少し呆れ気味な口ぶりで間にに入る。

「今ここで所長を怒鳴り散らしたところで何も進まないでしょうに。要はこれからどう対処するか。幸い、時間はまだあるようだが、急いで対策を練らねばすぐに間に合わなくなりますよ。」

そう言われて怒りをこらえ口をつぐむ男と、ハンカチで額の汗を拭う所長と呼ばれる男。

そして続けて中心に座る男に問いかける。

「大統領。いかがなさいますか？」

大統領と呼ばれたその男は、両手を組んで祈るような姿勢で考え込んだ。

緊迫した時間が少しの間会議室を包み込み、そして、静かに口を開く。

「私にも…正直この事態をどう捉えてよいのか分から…。今すぐどうこう結論を出そうにも、事実が判明しただけのこの状態ではまだ情報が少なすぎる。しかし、だからといって手をこまねいているつもりもない。」

一息入れた大統領がさらに続ける。

「そこでは、世界中より優秀なネットワーク技術者達を早急に募集し、事の対処にあたらせる。またそれに付随する必要な技術者も手配するんだ。もちろん極秘裏にだ。金はいくらかかってもいい。人選は任せるが、現段階では少數に絞れ。こんな事を外部に漏らすわけにはいかないからな。

情報管理は最上級レベルに。絶対にマスコミには嗅ぎつけられるな。^か場合によってはあらゆる手を使って情報操作を行っても構わない。」

途中、スーツの女が割つて入る。

「大統領、これはもう我々の国のみで対処すべき問題ではないかと。」

「わかつていい。しかし、今はまだこの事を各國政府に知らせるわけにいかないだろう。現状では世界を混乱に陥れるものでしかない。まずは…希望を見出すことだ。すべての責任を私が持つという問題のレベルではないが、とにかくまずは少數精銳で慎重かつ迅速に行動し、結論を導き出す。以上だ。」

第1章 その？～はじまりの予感～

見渡す限りの広い平原。遠くには、つりすりと山々が囲んでいるのが見て取れ、ところどころ先が見えない崖と思しき場所や、丘のような情景が見て取れる。

時おり春先のような爽やかな風が、野草を撫でながら駆け巡るその平原で、軽鎧に身を包んだ青年が一点を見据えたまま座り込んでいる。

「しまった…あの街、結構遠かつたな。まあいつか。ゆっくり進もつと。」

そう呟く青年は、背中に抱いでいた真紅色の両刃剣を田の前に置き、左腕に付けた少し幅広な金属のバンブルをさわり始める。

機械的な音が鳴ると共に、バンブルから放たれた薄グリーンの光の筋が、田の前の空間に半透明なディスプレイを形作る。

空間に表れたディスプレイの画面には、複数のアイコンやメニューが表示されており、左手の指でアイコンをタッチしながら、次々と現れるメニューを右手で操作していく。すると、画面右側にペンのようなものが表示されて浮かび上がり、それを手にした青年。

「次はこれにしようかな。」

そう呟くとともに、スケッチブックのようつまりになつた画面にペン状のものを当ててスラスラと走らせる。

瞬く間に描かれたのは、日本刀とも西洋刀とも言えない独特の形を

した片刃の長剣。

その姿は、刃側は日本刀のような鋭い切先から始まり緩やかな曲線を描きつつ、鍔の手前で引き締まり、鋭い一山の「こぎり刃」を作つていて。

鋒側は、鍔に向かつて刃幅が広がりながら、波が押し寄せる様な三山を銳角に形成。

左右に伸びた長めの鍔の中心と柄頭には、一粒の宝玉があしらわれている。

「よし。次は…何色にしようかな。」

表示された長剣に色を付けていく。

「できた。これで^{パンパイル}変換つとー！」

ボタン状のアイコンをタッチすると共に画面の表示が切り替わり、中央には作業の進行状況を表すバーが表示され、0%から100%に向かつて進んでいく。

そして、先程とは違う音と共に完了の文字が表示された次の瞬間、画面上には立体的に成形された長剣と、それを製造するために必要な素材一覧などが映し出される。

「おーこいつもなかなか強そうだ。やっぱ俺天才かも！」

「「」の素材は…全部揃つてるな。よし、^{サブスター}実体化つとー！」

バングルから、加速するような静かな高音が鳴るのに合わせ、画面には“Substantiating…実体化あと一分”と、

進行状況を示すバーが表示される。

その画面を静かに見つめながら待つ青年。

すると突如、遠くから轟音と振動を響かせ、牛の頭をした巨大な人型の怪物が、身の丈ほどあるまた巨大な斧を片手に持ちながら、青年めがけて向かってくる。

「きたきた！」

青年はその状況にまつたく動じず、立ちあがり際に置いていた真紅の両刃剣を右手で握りしめ、勇猛果敢に怪物目掛けて突進していく。そしてその最中、右手に握りしめていた真紅の剣が光り初め、持ち手から形状を変えていく。

形状がまだ変わり終わらないまま怪物の間合いに入りそうになる青年めがけ、振り上げられた怪物の巨大な斧が襲いかかる。

青年はその間合いを見切っていたかのように、直前で大地を力強く踏み締めて空高く飛び上がり、振り下ろされた斧は空を裂き轟音と共に地面へと打ち刺さる。

あつという間に怪物の背丈を超えて高く跳躍した青年は、光り輝く太陽を背に、すでに完成した長剣を両手で握りしめ、怪物の頭上めがけて振り下ろす。

「悪いけど！お前なんか一撃だ————！」

「タケル！タケルー！早く！」飯食べないと学校遅刻するわよ！」

「はーい！て、あ、やつぱ一撃か。ていうかこいつじゃ試し切りに
もなんないな。帰つてからパーティ組んで大龍ティアマットで
も挑んでみよつと。にしても、また強い剣を作っちゃつたぜ。」

頭にはヘッドセットマイク、両手には指だし手袋のような装着式の
コントローラーを付け、右手にはシンプルな剣のような形をしたプ
ラスチック製の物をもつた少年が、軽鎧の青年と倒れた怪物が映し
出されているテレビ画面の前に立つて見つめながら、少しニヤけた
顔でそう呟く。

そして、画面に映し出されているそのゲームを終了し、剣状の物を
置いてヘッドセットやコントローラーをはずし早々と身支度をして、
階段を駆け降りる。

少年の名は、サトウ タケル。

この物語の、主人公である。

階段を下り、朝食が用意されたテーブルの席についたタケルに、母
が声をかける。

「あんたまたゲームしてたの？その早起きをたまには勉強に使いな
さいよねまったく。」

「はーい。明日はそりします。」

「嘘ばつかり。あなたもたまには言つてやつてよね。」

背もたれに思いきり体重を預けながら、豪快に新聞を広げ黙々と読みふける屈強な体をした父に、母が投げかけた。

「おいタケル。」

新聞で顔が隠れていて表情は読み取れないが、何やら威圧するかのようない野太い声が響いてくる。

「勉強しねえと…俺みたいになつちまうぞ。」

「ちょっとあなた、やめなさいよそういう言い方！そんなだからこの子が勉強しないんじゃない！まつたくあなたつて人はガミガミガミ」

「…。」

（お父さん怒る時の母さん怖え…大龍一撃だら絶対…）とでも言いたそうな顔でタケルは苦笑いを浮かべつつ、いつもの席に兄の分の食事がない事に気づいて母に質問をする。

「あれ？お兄ちゃんは？」

「え？ああ朝課外だつて、もう学校行つたわよ。あんたもお兄ちゃん見習いなさい。」

「うへへ、高校つてそんな厳しいの？行きたくないなあ、今でもキツツいのに。2年後、高校がなくなつてますよつこつと。」

「何いつてんのよもう。早く食べて学校行きなさい。」

「はーい。」

タケルは、そう返事すると黙々と朝食を食べ始めた。
すると、ふと、テレビのあるニコースに目がとまった。

テレビでは、画面左に立っているキャスターが、迎えの席に座っている数人の「メンテーターに向かって、話しかけるようにニコースを伝えている。

“ 1年前の2021年7月、世界各地で14人が次々と行方不明になるという事件が発生し、一時インターネット上で話題になったのを、皆さん覚えておいででしょうか？ ”

この事件は、行方不明者全員が直前まで自室にいたことが確認されており、突如としていなくなつたと考えられた不可解なものでした。
また、不明者同士の接点はなく、日時も国もバラバラだったこともあって謎は深まり、現在も誰一人として見つかっておらず、未だ解決に至つておりません。

当初この14件の行方不明事件は、まったく知られることなくそれぞの地域で未解決事件として終わるはずだったのですが、複数の人が書き込んだある内容のブログが発端となつてインターネット上で話題となり、世間でも知られるようになりました。

そのブログの内容ですが…まずはこちらをご覧ください。

フリップボードを出し、貼りつけられた大きな一枚の写真をさしな

がら説明を続けるキャスター。

“ 皆さんこのゲームをご存じでしょうか?
今や全世界の家庭に普及しているSintendoの体感型ゲーム
ハード「CONNECT3（「ネクトスリー」）」の専用ゲームソフト、
「Final Weapon」です。 ”

そう説明するキャスターに向け、若い女と男の「メンテーターから声があがる。

「あ、私やつてますそれ。キャラクターの服とか自分でデザインできちゃうんで面白いんですよ。」「僕も遊んでます。」

説明を続けるキャスター。

“ おー方は”存じのようですが、説明しますと、このゲームはインターネットを通じて他のコーディネーターとゲームの世界と一緒に冒險して楽しめる、いま世界で最も流行っているオンライン・ロール扮演游戏です。

なぜこのゲームを紹介したかといいますと、実は行方がわからなくなっている14人は全員、このゲームのコアなコーディネーターだったということが、先程のブログから判明したんです。

というのもそのブログには一様に、前日まで一緒に遊んでいたゲーム内の友人が、行方不明のニュースが流れたその日から突然現れなくなつたそうで、知っていた地域と年齢を照らし合わせてどうやらその友人じゃないのか？という書き込みをしていましたそなんです。

それが複数書き込まれていたことからインター ネット上で話題とな

り、その後の捜査で事実であったことが判明してからは一層騒がれ広がつていったのです。

そしてなぜ今回この事件をお話したかと申しますと、先週と一昨日に、東京都新宿区と大阪府大阪市、福岡県北九州市で起きていた3件の行方不明事件ですが、その後の捜査でこのファイナルウェポンのコアなコーナーであつたことが判明し、ある噂が立ち始めているのです”

続けられるそのニュースの話を、お皿を洗いながら片手間に聞いていた母が、ふとタケルに尋ねる。

「ファイナルウェポンって…あなたがやつてるやつじゃない？」

「そうだけど。まさか今の氣にしてんの？大丈夫だつて、関係あるわけないじゃん。偶然だよ偶然。行方不明にどうやってゲームが関わるんだよ。それに世界中で流行つてるゲームなんだから、たつた14人つて。あ、今回ので+3人か。ま、たまたまだよ、た・ま・た・ま。」こちそうさまーっと。

そう言いながら、勉強の話に切り替わるのを警戒してか、まだ少し残っている食べかけのパンを急いで口に詰め、そそくさと玄関に向かうタケル。

「ひつへひふあーふ！（行つてきまーす！）

「あ、ちよつと…」

まだ話し足りないかのように何かを言おうとする母だつたが、その声にかぶせるように父の野太い声が聞こえる。

「おじタケル！…精一杯、遊んでー」

「あなた！」

父が得意げな顔で親指を立てながら母に口はなかれる姿を尻しり目に、タケルはニヤけながら足早に玄関へと向かつ。

「あー！」

靴を履こうとした直前何かを思い出したのか、一階の自室へと駆け上がり、床に置いてあつたノートを取り今度こそ玄関を出て行くタケル。

「おはよー」「おはよー」「おはよー」

夏の暑い日差しが照りつける中、登校してきた多くの生徒たちが、友人や校門に立つ先生と明るく元気な挨拶を交わし合っている。

ここは、タケルが通う中学校。

普段通りの時間についたタケルが教室に入る。と同時に叫ぶ。

「おはよーっヒー・できたぜ、新作ー！」

「おはよーーー」「マジでー」「見せて見せてー」

タケルの机に駆け寄つてくるクラスの友人達。

「今回の新作はこちりー！」

そう言ひとタケルは、家を出る直前に手にしたノートを机の上に広げ、一枚一枚めぐりながら見せて行く。

「うおー！」「すげえー！」「やっぱ上手いなあ」「カッコいい」「めっちゃ強そつ…」

そのノートを見ながら、周囲から様々な称賛の声があがる。羨望の眼差しで魅入る友人達に、描かれたものを説明していくタケル。

「この小剣は、シャルティーー。雷状の刃が特徴で、たぶんコンパイルすると雷の属性がつくと思つ。」

「この長剣は、名前はまだ決めてないんだけど、なんか金持ちになれそうなアビリティがつくかも。」

「これは、ごめんもう既に朝から作っちゃった。長剣ミンストレルティン。」

「そしてこの邪悪そうな大剣がバルマムンド。氣持ちは闇属性なんだけど…神聖属性になりそうな予感もするなつと。」

そこには「ページ」と、細長い雷状の刃をした小剣や、高貴な雰囲気を醸し出すスマートな両刃の長剣、先ほどのゲーム内にも登場した片刃の長剣や、いびつで禍々しい感じだがどこか神秘的で吸い込まれそうになる幅広刃の大剣、他にも鎧や盾といったものが描かれており、その一つ一つに、全体像はもちろん切先から見下ろすような俯瞰図、別々な角度から見たものなど細かい描写も付け加えられている。

そのイラストは、とても中学生が描いたものとは思えない出来栄えで、細かいところまで緻密に書き込まれており、その場に実際にあらかのような立体感や金属の独特的の質感が伝わってくるほどのものであった。

タケルの説明を熱心に聞き入る友人達の後方から、また一人近づいてくる。

「おはよ～っす。」

「あ、おはよーゴウト。めずらしく遅かつたな。」

少年の名は、シバサキ ゴウト。

この物語の、もう一人の主人公である。

「ちょっとテレビ見ててな。お、新作か！かあ～また強そうなんばつか。相変わらずいい仕事してるわ～。」

「お姫様のおかげですょっとー！」

そう答えるタケルがニヤけた顔で話を続ける。

「それでは皆さんお待ちかねの……小剣シャルティー二、10円からひとつー。」

そう発した直後、タケルの頭が叩かれ軽快な音が教室に響いた。

「だ・か・ら、商売すんなつてのアンタは！」

「いつて……あ。」

振り向いたタケルが、呴いた少女を見て苦笑いしながら答える。

「……んだよマイ。今日はやけに早いじゃんか。」

少女の名は、ミヤモト マイ。

この物語の、ヒロインである。

「今日は第一人が出て行くの早かったの。ってそんなことまだひとつもいから。今またなんか売ろうとしてたでしょ！」

「いや……えつとこれは……そつそつ、個展を開いてたんだよ。」

「な・に・が、個展よ！ ファイナルウーポンのアイテムの現金取引は禁止されてるでしょ！」

「ちがう、これはあくまで作品売ってるだけだから問題ないって！ 画家と一緒に画家と！」

「つべつべ言わないーおばさんに言いつけるわよー！」

「あ、いや、それだけはちょっとマズいかなっと……」

「そもそもあなたたちも買わない！ ゲームにそんなお金使ってビックりのよまつたく！ ガミガミガミ」

周りの人間にも飛び火していくマイの説教の最中、いつの間にか少

し離れてその様子を眺めていたユウトが、間に割つて入る。

「おー！人さんは今日も熱いねえ～」

そう言われて息の合つた返答を返すタケルとマイ。

「はあーーッ！？」

「あ、いや、そんなに怒んなよ…ハハ、冗談冗談。ところで、そんな怒りっぽい2人もブルブル震えちゃう取つて置きの話があるんだが…」

「またはじまつたよ～ユウトのオカルトークーもういいくつ！」

そういうて笑う友人達。

「いやいやそういうなよ今度のはマジだつて！」

「はいはいわかつたよ。で、今度のはどんな話？」

「恐怖の……後頭さん……。」

「はいダメえー、全然コワそうじやないー！」

またも爆笑する友人達。

「いいから聞けつてばー！ここからだよここからー！今日のニュース見たヤツいるか？ファイナルウェポンが関わってるって言つ行方不明事件の話。」

「いや見てない」「俺も

どうやら登校時間が早かつた生徒は見ていないようだつたが、そこでタケルが答える。

「あ、俺それみた。1年前に世界中で突然行方不明になつた人たちつて、全員ファイナルウェポンの高レベルプレイヤーだつたつていふ話でしょ？全然知らなかつた。」

「そろそろそれ。でな、最近ほら、日本でも起きてただろ、3人行方不明の事件。その人たちもファイナルウェポンの上級プレイヤーだつたみたいで、世界中で起こつた行方不明事件と似てるんだと。」

最初の反応とは打つて変わり、聞き入るタケルとマイと友人達。話を続けるユウト。

「でな、少し前にファイナルウェポンの噂でこりこりのが流れてたの知つてるか？」

ある場所で極稀に、プレイヤーキャラやノンプレイヤーキャラ、モンスターとも違う感じの妙な半透明のキャラクターが出現して“これ、欲しくないか？”ってしつこく聞いて追いかけて来るつていう。で、そのまま逃げ続けると今度は、画面に向かつてくるつていう…。」

「う…。」

少し身震いをする友人も出始める中、淡々と話を続けるユウト。

「でな、逃げずに「いる」つて応えると…ちょっと借りるやタケル。

「

そういうながら、タケルのノートの端に“go to USAN . ex

e”と書き込んでいくユウト。

「これが“ゴトウサン”って読める事からそつ言われてるらしいんだけど、パソコン用のファイルを置いて消えちゃうんだと。そしてそのファイルをパソコンに移して実行した後、画面に背を向けて、ヘッドセットマイクで“後頭さん…後頭さん…私を冥界へ連れて行って下せ…”と囁えるとお…」

と次の瞬間。

「うわあ————！」

いきなり友人の一人が大声を出し周囲を驚かせ、全員が一斉に体を強張らせる。

「お、おま、脅かすなよーー！全力でハタクゼー・マジでーー！」

と、この手の話題に弱いタケルがあわてふためいた顔で、驚かした友人に向かつて言い放ち、その姿をみた周囲は爆笑の渦に包まれた。そしてまた、ユウトが話を続ける。

「おいおいオイシイとこもつてくなよー。…でだ、そう囁えると…画面から…こう両手が伸びてきて、後頭部を…ガシイツツーー！…と掴まれてそのまま画面に引きずり込まれる…つてさ。」

先程の爆笑もつかの間、また一瞬にして場が凍りつく。

「今回のは…ユウトにしては怖かつたな…。」

と、一人の友人が話し、満足げにユウトが答える。

「だろ？」

そしてせつときの驚きをまだ引きずっているタケルが引きつり顔で話し始める。

「ハハ、ん、んなわけないじゃん。どつからそんな話きてきたんだっての。おれ一応、ファイナルウェポンで五本の指に入るクリエーターだぜ？ そんな話あつたら知つてるつて！」

「……だよなあ。実はこれ、全部今朝のテレビで言つてた事。あれ絶対ねつ造だよねつ造。話題作りに脚色しちだけだな。つて……俺も最初思つたわけよ。ところがだな……。」

「は？ どつしたつての？」

「その一コース見て、気になつてネット上探してみたんだけど、そこで偶然見つけた攻略サイト内の掲示板に書いてあつたんだよそのことが。書き込まれた日は昨日。テレビ局はたまたまそれをみて大げさに話したんだなきつと。」

その話を聞いて、タケルの表情が少し真面目な顔つきに変わっていく。

「攻略サイト？ ……コウト、そのサイト後で教えてよ。」

「ん？ どつした？」

「いや、実は俺の武具を良く買つてくれてる……あ、ゲーム内でね……お得意さんのゲームマスターが言つてたの思い出した。最近ゲーム

がうまく行かないからって適当に変な噂振りまじてまわってるヤツがいるって。それかも。」

「ゲームマスターに武具売るって、すぐえなお前…。って、そんなんだ。まあ教えるのはいいけど…多分もうなじと酔ひや。」

「は?」

「こや、れいを登校中こそ、また気になつて携帯で見てみたんだけど、もひ404、サイド」となくなつてページが見つかりませんだつてや…」

「わづか…。」

「ま、携帯で見たからかもしないから、一応後からタケルのアドレスにメールしどくな。」

「ねえ。」

そういうと場の空気が少し変わり静寂が流れたが、すぐさまマイが場を和ませようとする。

「もう一朝つぱらから変な話しなごでよね…。」

やつこいながりコウトをハタハタ。

「イターすみませんアネさん。」

そう切り返したコウトをさら口唱へマ。その一人のやり取りにまた周囲が笑いはじめる。

する」と教室の扉があき、担任の先生が入つてくれる。

「おはよー。はい席につけー朝礼はじめるぞー。」

「はーいー。」

勢いよく返事をする生徒と、タケルの周囲にあつまつっていた生徒たちがいそいそと散らばつて席につき、朝礼が始まるのであった。

第1章 その？～はじまつの予感～（後書き）

すみません、かなり抜けてました…。

第1章 その？～予感への接近～

終礼を告げるチャイムが校内に響き渡る。

タケルは、やり終えたとばかりに満足げな顔で、両手を精一杯広げて背伸びをし、一日の疲れを解放させる。

うんと伸びきった後は机の勉強ノートに目をやり、授業時間を使って描かれたと思われる様々な武器防具の下絵を少し眺めて、ニヤニヤしながら帰宅の準備にとりかかる。これが終礼後のお決まりの行動。

早々と教室を出ようとしたタケルの下へ、コウトが竹刀の入った長い袋を担いで駆け寄ってくる。

「タケル、今日部活は？」

「じめん！今日はサボり！また新しいの考えたから早く仕上げたくて。それに、朝のコウトの話も気になるし。竹刀もほら、忘れてきちゃつたってわけで。ま、先生には上手に事言つとこでよ。」

「はー、仕方ねえな。じゃ今度、俺専用の武器、期待してるからな。

」

「オッケー任せとけつとーあ、アドレス送つといてね！」

「了一解。じゃーな。」

少しあきれ顔ながらも、穏やかな笑顔でコウトはタケルを見送った。

「ただいまー」

自宅に帰りつくなり駆け足で階段をのぼり自室に入ったタケルは、すぐにバッグを机に置いて椅子に腰かけ、バッグから勉強ノートとファイナルウェポン用の「デザインノートを取り出し、授業中に描き上げた下絵を「デザインノートへと書き写していく。

その動きはプロの漫画家顔負けの正確さとスピードで、下絵に少しのアレンジを加えながらも同じ寸法で描き移していく、それをベースに今度は俯瞰図や違う角度から観た図を描いていく。

学校で描き溜めた武具は52・3ほど。その中から、気に入ったものを選び清書していくタケル。

約2時間ほどたつただろうか。選び出した17・8ほどの武具を書き終えたタケルは、やはり満足げな顔で背伸びをし、疲れを解放し終えた後は1階に降りて食事をとり、風呂に入つてまた駆け足で自室へと戻つてくる。

夕日が沈み始め、部屋はその赤みで覆われている。まだ十分に明るいが、先程よりは薄暗い。

「さてと、メール来てるかな」と。

そう呟きながら部屋に入ってきたタケルは、壁に設置されているボタンに触れる。すると、部屋の電気がつき、テレビには番組が映し出され、エアコンが静かに動き始める。

タケルたちの生きる時代、2022年には、全ての家電は家庭内ネ

ツトワークで繋がっており、それを管理するシステムにより、ボタン一つで設定していた家電を動かすことができるようになっている。

明るくなつた部屋を眺めて床に座つたタケルは、近くに置いてあつた5インチほどのディスプレイが付いたテレビリモコンを両手で持ち、リモコンについている“PC”と書かれたボタンを押す。すると、リモコン画面にはパソコンのデスクトップが映し出された。

そこに表示されている複数のアイコンから、メールソフトをタッチし、早速メールをチェックするタケル。

「お、ちゃんと送つてくれてたな。」

コウトから送られてきたメールを開き、そこに書かれているウェブサイトアドレスをタッチすると、今度はテレビ番組が消えてウェブサイトが表示されたが、そこには404の数字とサイトが存在しないというような文が書かれてあつた。

「……やつぱ、消えてたか。」

少し残念そうな顔でその表示を眺めるタケルが、いつもの癖でふと更新ボタンを押してしまい、ページの再表示が行われる。

「あつと。あれ?なんか出たって…………はあー?え?なん
で!?!」

更新したことで表示された先程とは違つ画面を見て、思わず声を張り上げる。

「なんで俺の名前が書いてあんだつての!それに、蒼穹そうきゅうの丘おかつて……

「！」

表示された内容に驚き、惑うタケルだったが、すぐにリモコンを操作はじめめる。

リモコン画面に映し出されたのは、0～9までの数字や*・#、通話と書かれているボタン風のアイコン。頭に数字を記憶しているのか、慣れた動きで次々と数字を押していく、通話をタップするタケル。

すると、リモコンから電話の呼び出し音が鳴り始め、しばらくしてリモコン画面に人が映し出された。

「ようタケル、どうした？」

画面に映ったのはコウト。リモコンから声が流れてくれる。

「今さ、コウトから教えてもらつたサイト見てるんだけど…」

「もひなかつただろ？」

「それが、ちょっとこれ見てよ。」

そう言つてタケルは、リモコン画面をテレビへと向ける。

「あつたのか？」

コウトは少し驚いた様子で、タケルが向けたことで映し出されたテレビ画面を見た。

「これ……マジか? 何でタケルの名前……しかも、蒼穹の丘に来て……ファイナルウエポンのだよな。つていうかネットに実名つて……ちよつといつちでも見てみるな。」

ユウトはちよつといつと、すぐにパソコン画面を開いてサイトを見てみた。

「……? 404だぞ?」

「は?え、ちよつとまつて、もう一回更新してみる……いや、映つてるけど……」

「うわ、ちばない。ほら。……どうしてことだ? アドレスあつてるか?」

「うそ、あつてる……何だよこれ、すげえ怖いんだけど……。」

少し異様な空気が流れ、静まり返る一人。すると、ユウトがたずねる。

「で、行くのか? 蒼穹の丘。」

ユウトの問にまだ少し黙りこむタケルだったが、意を決したかのよつな顔つきでいつ答える。

「ユウト、ちよつと今からつき合わない?」

「オッケー」

タケルの逆の問いかけに、この手の話が大好物なユウトが嬉しそうに即答した。

「おま…楽しんでるだろー！」

「ハハ、わりいわりい。でもなんか、ワクワクしねえ？」

「まあ…ちょっと。ファイナルウェポンの話となれば別だっての。この誘い、受けちゃうぜー！」

「尊のあいつが出てくるかもな。よし、そいつと決まれば早速行くか。じゃ、あっちでまたな。」

「おひ。」

そう言つて通話終了のアイコンを押したタケルは立ちあがり、ヘッドセットマイクと両手にコントローラーを装着し、そのコントローラーについている電源ボタンを押してCONNECT3を起動させた。

テレビには、SwitchとCONNECT3のロゴが浮かびあがり、そして消えると同時に複数のゲームのスクリーンショットが一覧で表示される。

タケルはその中からファイナルウェポンを選択し、ゲームをスタートさせ、机に置いてあったファイナルウェポン専用ソードコントローラーを手に握りしめた。

テレビ画面には、見渡す限りの広い平原。燐々（さんさん）と輝く太陽があたりを明るく照りつける。

長剣ミンストレルティンを背負い、一点を見据えている青年キャラ

クターが映し出されている。

「やつか、こじでやめてたんだ。コウトは来てるかなつと。」

そういうて、手にはめているコントローラーを操作しようとしたその時、タケルのキャラクターが突然小さな影に覆われ、それが徐々に大きくなつていぐ。

「あーあ、こいつは急いでるつてのこ。元。

タケルはそのまま眩きながら冷静に、右手に持ったソードコントローラーを頭上にもつてきて横に倒し、左手でソードの先を支えるように構えた。

タケルと同じように構えたキャラクターの視点が、真上へと向けられた瞬間、目の前には巨大な羽を広げた鷲のよつた怪物が足の爪で襲い掛かってきていた。

しかし、それを見る前から分かっていたかのように、すでに防御の姿勢をとつていたキャラクターは、その爪を受け止めてはじき返し、鷲の怪物はそのまま斜め上空へとまた舞い上がる。

「やっぱ、こいつか。余裕。」

そう言つとタケルはソードを下ろし、左足を少し前に出し左手を斜め上に向けて構えた。すると、同じ構えをとつたキャラクターの左手を、薄い青緑の光が覆う。

そして次の瞬間、上空をぐるぐると羽ばたきながらこひらの様子を伺っていた怪物を、空気が歪んだような球状の層が覆い、その中を無数の刃のような風が吹き荒れて攻撃したかと思うと、その層から

怪物がはじき出されたかのように猛スピードで、錐揉み状態になりながらキャラクターの方向に落ちてくる。

その落ちてくる怪物を見据えて静かにゆっくりと長剣を構えたキャラクターは、すれ違いざまに一閃。

怪物は両断され、轟音とともに地面に衝突して転がり、小さな光を拡散させながら消えていった。

「やつぱ まけんき“魔劍技・地・蒼空閃”は何回見てもカッコいいなあ。つて、なんだよ何も落とさなかつたし。あーあ、早くコウトの所に飛ぼうつと。」

そう言つと、コントローラーを操作してメニュー画面を開いた。

表示されたメニューから“フレンド”と書かれたボタンを選択し、表示された複数のフレンド名を眺めてコウトのログインを確認したタケルは、その名前を選択して移動と書かれたボタンを押した。

するとキャラクターを中心に、足下の地面に薄い青色をした半透明の円があらわれ、それが頭に向かっていくつも加速するように昇つてはゆっくりと消えていき、次第に青白い光がキャラクターを包みはじめめる。

その光が完全に覆われた瞬間、強烈な白い光を発すると同時にキャラクターが消え、青年が居た場所にはキラキラと小さな光が拡散し、そして画面が暗転して別な場所へと切り替わる。

次に表示された場所は、中世風の建物が立ち並ぶ大きな街の大通り。通りの端には多くの露店が軒を連ね、たくさんのプレイヤーキャラクターが行きかっている。

それは一見すると、どのゲームでも田にするような光景のはずだが、そこには異様とも思える不思議な光景が広がっていた。

自ら武具をデザインできるゲームだけあって、プレイヤーの姿かたちは様々。

中世風の鎧はもちろん、どこかのゲームや映画で見たような格好をした者や現代のスポーツのような服装をした者。忍者や侍。また、ギヤル系ファッショனに身を包んだ女キャラクターや、原色だらけの色をした奇抜で斬新な服装のキャラ。果ては、熊の着ぐるみや股間に白鳥を装備して踊つてゐる男キャラクターまで。プレイを始めたばかりの人は、このカオス状態に驚き戸惑う事必至である。

街の所々では、その異様な光景を生み出す元凶とも言つべき、さまざまな自作の武器防具を販売しているキャラクターの姿が多くうがえる。

すると、ある場所に人だかりが出来てゐる。

その中心付近で、小さな光が収束していくように一点に集まり始め、さきほどの移動するのとは逆の流れで、薄い青色の半透明の円が上から下降してはゆっくりと消えていき、青白い光と共にタケルのキャラクターが現れる。

キャラクターの目の前には、全身を青い重鎧おもよねに身を包んだ青年が立つていた。

その青年の鎧は、金色のラインや銀色の装飾がなされており、所々に配色されている黒が絶妙な美しいコントラストを生み出し、見る者を魅了するフォームをしている。

実際、周囲の人だかりは青年を見る目的で出来ていたようだ。

「おおー、いつ見てもカッコいいな、俺の鎧。」

その青年を曰こしていはばずのタケルがそう呟くと、青い鎧の青年が話しかけてくる。

「遅かつたな、タケル。ってか今はもう俺の鎧だかな。」

青い鎧の青年はコウトのキャラクター。

ファイナルウェポンは、周囲にフレンドキャラクターが居ると、ヘッドセットマイクを通してしゃべった声が直接相手にも聞こえるようになつており、スマーズに会話をはじめる一人。

「お待たせ。アスガルド平原の方に朝から行つてたもんで。『ごめんコウト、やっぱそれ返して。』

「やだね。」

笑いながら突然返却を迫るタケルに、笑いながら即答するコウト。

すると、タケルのゲーム画面にチャットの申請が次々と舞い込んでくる。

「またか…だからあんまこの街好きじゃないんだよね…。なんでお前にこにいたんだよー！」

「わいこ。まあそういう言わずに、答えてやれよ。」

「はあー…嬉しいような悲しいような…」

少し苦笑いを浮かべながらそう呟いたタケルは、チャット画面を開

き、申請してきた20名ほどのプレイヤーの中からランダムに5名を選択し、チャット画面へヒドラッギングする。

すると、次々とメッセージが表示されていく。どうやら、武具製作の依頼のようだ。

タケルはこの世界では有名な武具クリエイター。知らないプレイヤーはほとんどおらず、見つかると途端に「いやって、チャットの申請と武具製作の依頼が舞い込むのだ。

一通り希望の武具を聞き、注文を受けたプレイヤー名を登録し終えたタケル。

「ふうー。」
「じゅじゅ何もできないな。コウト、蒼穹の丘付近まで飛ぼうぜ。」

「了。解。」

タケルがそう提案しコウトがうなずくと、次々と舞い込むチャット申請をそのままにし、タケルのキャラクターが一礼をするとともに、一人のキャラクターを移動の光が包み込む。

そして移動した先は、蒼穹の丘へ向かう途中にある、静かな森の中。

そこでは、遠くで数名のプレイヤー達が敵と戦っているのが見えたが、こちらには気づいていない様子で、近くには一人以外誰もいなかつた。

「よしつと。これで準備ができるな。」

「しかし、さすがタケルの武具は人気だな。」

「まあね。」

そう得意げに答えるタケルに、ユウトが話を続ける。

「そんな注文に困るぐらいだつたら、いいかげん武具を流通させればどうだ?」

「いや。俺のポリシーはこの世に一つだつと。武具1種類につき1個限定! その方がリアでカッコいいじゃん!」

「そのこだわりがなー。井、お前らしいよ。さて、本題いくか。」

「おうー! まずは、丘に向かう前に装備を整える。新作出来たなんだけど見てよ。」

そう言つとタケルは、自室の机に置いてあつたファイナルウェポン用の「デザインノートを取りページを開いた。

そこには、青色が少し混じつて濁つたような灰色をした古代ギリシヤ風の鎧・盾・兜が描かれており、その真上に左手の脈の当たりを持つてきて手のひらのボタンを押す。

すると、シャツァー音のような機械音があり、それを確認したタケルは「デザインノートを机に戻した。

ゲーム内ではタケルのキャラクターがその場に座り込み、左腕のバンブルをさわつてディスプレイを表示し、そこにペンを走らせる動作と共に、ノートに描かれていた鎧などが表示されていく。

表示され終わったのを確認し、「バイバイ変換を行つたタケルは、ユウトのキャラクターにコンタクトを取りそれを見せる。

「これどう?」

描かれた鎧を見たコウトは突然噴き出し、タケルに聞き返した。

「そんな装備で大丈夫か?」

「大丈夫だ、問題ない。」

タケルの真顔の返答で更に爆笑するコウト。一人にしか分からぬ話のネタが展開しているようだ。

「いやいやダメだろそれ。死亡フラグ立つって。」

「やっぱダメ?せっかくコウトにプレゼントしそうと思つたのにな。」

「ダメだつて、一番いいのを頼む。」

そう真顔で言い放つコウトのセリフに噴き出すタケルだったが、今度は違う鎧と剣をゲームに読み込んでいく。そして出来上がった武具をまたコウトに見せる。

「今度のはどう?」

「お、かつこいいな。今の装備より強いし。装備熟練度も…大丈夫だな。で、こいつはいただけるのかな?」

「もちろん一部活の件があるしな。」

「サンキュー。」

「素材はそりつてゐし、早速作つて渡すよ。」

タケルは実体化サブスターを始め、出来上がつた剣と鎧をコウトに渡す。それを早速装備するコウト。

その鎧は上半身装備型の軽鎧かるよういで、白色だが、それはまるで初めて目にするかのような美しい色合いをしており、肩宛ては外に向けて猛々（たけだけ）しく反り出し、紺色のラインが鎧全体のフチを駆け巡つている。

剣は、キャラクターの背丈と同じくらいの両刃の大剣。

切先は山型で、鍔に向かつて少し広がりながら降りていき、鍔付近でぐびれを作つているシンプルな形。刀身の色は鎧と反した深みのある黒。刃の中心には金色をした溝が鍔から切先に向けてY字に走つていて。

鍔は、刀身の五分の一もの長さと幅がある丸い形をしており、中心はくり抜かれた形で、その空いた穴からは刀身の砥がれていない金属部がむき出しどとなつて握りまで伸び降りている。鍔と握りの色は、血のような濁つた赤色。

「ちょっとその鎧にあつ配色か心配だつたけど、なかなか様になつてるじやん。コウト。」

「いいなこれ。気に入つた！サンキュータケル。」

そう言われたタケルは、少し照れくさそうな笑顔を浮かべた。

「さて、次は俺つと…」

タケルは、すでに実体化^{サボスター}されていた鎧を選択し、それに装備を切り替えた。

その鎧は、コウトのそれよりも白く…いや、白と決め付けるのもおこがましい見たこともない神々しい色合いで、鎧といつよりも衣と言つ方が正しそうな不思議な質感をしている。そしてさらに不思議なことに、胴体と肩、そして前胸から左肩へ向かい後ろから巻きつくようになに顔まで反りたつた襟^{ヒリ}まで、まったく継ぎ目が無く、まるで身体を覆うように巻きつくように装着されている。

全体には、シワのような流線が身体のラインを魅せるように走り回つており、その完成された造形美は、見るものを魅了する。

するとその装備を見たコウトが笑いながら声を上げる。

「ずりいぞタケル！ それ、一番いい装備じゃねえーか。」

「カツコいいしょ。」

タケルは、ニヤけ顔でそう答えて話を続ける。

「あまりにカツコよかつたから俺なりにアレンジを加えて描いてみた。オリジナルデザインじゃないから誰かにあげるのは気が引けてね。でもさ、悔しいけど強いんだこれが。今のコウトの熟練度じや全然足りないぜ。」

そう得意げに言つタケルの言葉に、少し悔しそう声をあげるコウトだったが、その鎧の美しさに見とれていたようだつた。

そして準備を終えた一人は、蒼穹の丘に向けて歩き始めた。

第1章 その？～予感との接觸～

雲ひとつない澄みきつた青空と、広大な丘があたり一面に広がっている。

「こは、蒼穹の丘。

周りには、遠くで怪物がうるさいているだけで、プレイヤーは見当たらない。

この辺り一帯の敵レベルは中の下程度で、タケルとコウトにとっては雑魚でしかなく、丘に来る途中に出くわした数々の怪物たちも難なく蹴散らしてきた二人。

しかし、キャラクター操る本人達が疲れたのか、今は座り込んでいる。

休憩の為か、しばらく黙り込んでいた二人だが、タケルがコウトに話しかける。

「なんで、この丘なんだろ？」

「……だな。しかも誰もいないし。着いてもう一〇分経つってのに。」

「もしかして…手の込んだイタズラってオチ？ いつの間にかパソコンに侵入されてたとか…。」

「それは難しいと思うけどな。一昔前のパソコンならありえるけど、今はとてもネットワークで繋げられるから、その辺はしっかりしてるし。」

「でもさ、なんであのページ、俺のにしか表示されなかつたんだ？」

「そこだよな。…タケル、国家にたて突く事でもしたか？」

「はー? なん」としてないつての! なんだよそれ!」

「ハハ、いやそんな侵入とか高度な技術持つてるの、国か天才ハッカーぐらいだらうと思つてな。」

そんな談笑ともとれる会話を続ける一人だったが、突然ユウトの叫び声が響いた。

「タケル避けろーッ!!!!」

その声をあげると共にその場から飛び退いたユウトのキャラクターだったが、少しよそ見をしていたのか、タケルがそれに気づいた時にはすでに遅く、キャラクターの目の前には直径3メートルはある真っ赤に燃え盛った巨大な炎の球が迫っていた。

「やばいッ!!」

タケルはそう叫びると同時に剣を前に出し防御の姿勢をとつたが、炎の球が剣にぶつかり、轟音と共に碎けて飛び散つたかと思うと、当たり一面をキャラクターごと業火が丸のみにした。

「いきなりかよ!!」

タケルはそう叫びながら業火から必死に抜け出し、すかさず周囲を確認すると、飛び退いたはずのユウトのキャラクターも含めて広い

範囲が少し暗い事に気がついた。すぐに視点を上空に向かたその時、コウトが半笑いで呟く。

「これ…大龍…ティアマットじゃね…？」

コウトのキャラクターが見上げているその先には、キャラクターの数十倍、いや、豪快に地上を煽ぐように羽ばたかせている6枚の翼まで合わせると、百倍近い大きさの巨大な龍が滯空していた。全身は金属質のように光る漆黒の鱗で覆われ、体と同じ大きさほどの尻尾を垂らし靡^{なび}かせながら、ルビーのよう赤く光った鋭い眼でタケルとコウトを睨みつけている。

タケルは、そんなまさかという気持ちで画面に映るその龍を睨み返したが、さりなる驚愕の事実に気づいたのか、引きつり笑いのような声で呟く。

「…6枚ばね……？…うそだろおい…、ティアマットじゃなによ」「いつ……その上だつての…！」

「…上？！　まさか、バハムーティアか？！」

「何で…こんなところにいるんだよ………今俺らじや、絶対勝てないっての…つていうか、実装はまだなはずだつて…！」

「はあ……どうするタケル！…こんなヤツ相手じゃ逃げるのも無理だぞ…！」

「わかつてゐるつての！…今考へてる！…とにかく、攻撃は絶対受けちゃダメだ！…さつきの一撃、防御したのに体力半分近く持つてかれてた！受けたら死ぬ…！」

「マジかよ……せつかくタケルにいい剣と鎧もつたってのに…。

死んだらまた作ってくれるよな！」

「いやだ！ つてかそれ素材見つけるの大変だったんだぞ！ もう一度と作らないっての！」

「だよな…マジで…どうするか」

次第に顔つきが険しくなっていく一人がそんな掛け合いをしている最中、しばらく様子を見るように滯空していたバハムーティアが動き出す。

口を大きく広げ、極少な青白い光の球が現れたかと思うと、そこに青い光の線がどこからともなく現れては集まって行き、青白い光の球が徐々に大きくなり輝きを増していく。

「やばいつて…やばいよコウト…。あれ、雑誌に載つてた…。“^{いど}_{うじゅつ}動術・瞬”のアビリティ持つてるなら、すぐ使つといったほうがいい…！」

タケルは龍を睨みつけ瞬きもせず見据えながらそう言つと、自身も“瞬”を使い、キャラクターの全身から青い光が放たれて消え、コウトのキャラクターにもそれが起きた。それを確認したタケルが話を続ける。

「あれが放たれた瞬間、前方に全力でダッシュして回避な…。その後俺は、ヤツに少しの隙^{すき}が出来てる筈だから、今の武器でどれだけダメージ与えられるか仕掛けてみる。その先にコウトは逃げるよ。せっかく作った装備、壊されたらまたもんじやないからな。」

「マジでか？強気だなタケル。」

「逃げられないなら、やるだけやつてみるしかないじゃん。それに、ユウトだけでも助かれば上出来だつての。」

「……よし、なら俺ものつた。」

「は？」

その刹那だつた。

龍の口から×字型をした眩い光と、その中心から外に広がるように光の輪が放たれて衝撃波を生み、青白い光の球が猛スピードで飛んでくる。大きさはバスケットボールほどだつたが、放たれた瞬間に龍の巨体が反動で後ろに下がつており、もはや弾となつているそれの質量がどれだけすごいかを物語つていた。

放たれたその瞬間を何とか目視できた二人は、光の弾が二人の間の地面に着弾するその刹那、消えて見えるような猛スピードで前へ突進、回避し、その勢いで龍目掛けて飛び上がつていた。

「おまつ、なんで一緒に飛んでんだよー！」

「2人で攻撃した方が2人も逃げれる可能性があるだろー！」

その背後では、地面に着弾した光の弾が大爆発を起こし、爆音爆風を撒き散らして直径50メートルはあるだろう光の柱を遙か上空まで作り上げている。

その今まで見た事もない光景を目の当たりにしながらも、一人は不思議と冷静でいた。それは、今のレベルや人数では到底かなわない

筈の巨大な龍と対峙しているためであり、攻撃を当てる事ができる最大のチャンスに集中していたからであつた。

そしてタケルの予想通り、先程の攻撃により隙が生じた龍に対し、タケルが先に仕掛ける。

「長剣ミンストレルティーンで身に付けた、現レベル最強技！－！ 極きよ
剣技・空くう”！－！」

そう叫ぶとともに剣を振り上げると、刀身が淡く黄色い光に包まれ、その光がやがて龍の体ほどに巨大な斧を作り、タケルはそれを一気に振り下ろした。

振り下ろされた光の斧は、隙だらけの龍を直撃。

龍はよろめいて体制を崩し、地面へと落下し始める。その瞬間を逃さなかつたユウトが続けて仕掛ける。

「俺もこの剣で手に入れた新技、
試したかつたんだよな！！」「殺劍

落下していく龍を追うような形で一緒に落ちていくコウトが剣を振り上げると、深みのあつた黒色の刀身が赤みを帯びていき、溶岩のような赤色になると同時に力強い火花を放ち始める。

つぱことこの言葉がふたわしにモーションで振り下ろした。

碎”！…

その瞬間、刀身を中心に凄まじい爆発が起こり、龍を丸呑みにするかのような炎の柱が立ち昇りその巨体を焼き尽くす。

その場から急いで離れたコウトのキャラクターが、先に着地していったタケルのキャラクターに駆け寄り、話しかける。

「タケル！今のうちに逃げるぞ！」

すると、業火に呑まれて横たわったままの龍を見ていたタケルが咳く。

「…おかしいな…。」

「何がだ？」

「俺の一撃はよろめく程度かと思つてたんだけど、まさかそのまま落^ハ下するほどダメージを与えてたなんて…。それに、コウトの攻撃もあそこまで効くなんて…。」

そう話している時だった。龍の巨体は見る見る焼け焦げていき、小さな光が拡散し始める。

「は？うそだろ…何であれだけで…倒せるんだっての。」

「ハハ、これ、消えていつてるよな。やつたのか？」

「いや、こんな弱いはずないっての。雑誌じゃ20人がかりだったぜ？」

すると、辺りには誰もいないはずなのに、ヘッドセットから、中年がらいの渋い男の声が聞こえてくる。

「ほひ、ガキんちよにしてはやるじやないか。」

その声に一瞬びくつく一人。

「何だ、今の声…？まわり、誰もいないよな…。コウト、聞こえたか。」

「あ、ああ聞こえた…。フレンドも近くにはいないぞ」

急に聞こえてきたその声に驚きを隠せないタケルと、少しワクワクしているかのようなコウト。

声は続く。

「なかなかの潔さ。恐怖に立ち向かう心。冷静な判断力。突然の出来事でも機転をきかせられるその頭。打ち合わせなしの連携。そしてその、装備品。見させてもらつたよ、クリエイター・タケルくん。そして…コウトくんか。」

「はー？ 何だよこれ！？」

「せつ取り乱すな、タケルくん。せつせの褒め言葉が台無しになるぞ？」

すると、コウトが冷静にたずねる。

「あなたは、誰ですか……？」

「君は落ち着いているようだな。しかし、俺のことはもう知ってるだろ？」

そう聞こえた直後、テレビ画面には、キャラクターでも怪物でもない、後ろの背景が透けて見える中年の男が現れていた。その男はまさにテレビに映る人、日本人であり、肩につかない程度に伸びたクセつ毛の髪と無精ひげではあつたが、180cm近くはあるだろう細身の長身で、服装は薄いピンク色のYシャツとグレーのスースパンツ、磨かれた革靴という小奇麗な身なりで、膝下までの長さがある白衣を羽織っている。そして、その男はキャラクターの方ではなく、画面越しにタケルたちを見つめていた。

「ゅ……ゅ、幽霊だ————！」

それを見てさらに取り乱すタケル。

「ほら、タケルくんは幽霊が苦手か？それは驚かせたな。だが、俺は幽霊ではないぞ。」

その言葉に落ち着きを取り戻したのか、タケルが聞き返す。

「はい？……いや、でも何でゲームにそんな姿で……って、なんだこの状況……？」

混乱しているタケルをよそに、冷静ながら好奇心を隠せないでいるコウトがたずねる。

「もしかしてあなたは……後頭さん……ですか？」

「そうだ。俺は後藤。君らは“後”に“頭”と思つてゐるだろ？が、普通の後藤だからな。」

「聞いていた感じとは、だいぶ違つ……。」

「ハハ、あの噂だろ？俺が面白半分で書いただけだよ。俺もオカルトファンでね。コウトくんもそうなんだろ？気が合ひそうだ。」

その言葉に反応したタケルが割つて入る。

「じゃ、あのページ使って俺を口口に誘い出したのってアンタか！？」

「ほう、アンタとは、大人に対する口のきき方がなつていなかつても、そんな元気なガキンちょ、おじさんは好きだぞ。」

「得たいの知れない大人にタメ口きいて何が悪いっての！何で俺の名前、実名知つてるんだよ！」

さつき驚かされた事が後を引いているのか、後藤に強くあたるタケル。

「知りうと思えばなんだつて調べられる。やつこいつ世の中さ。」

「やっぱり俺のパソコンに侵入したんだな……！」

「いや、そうじゃないんだが……ま、それはどうでもいいじゃないか。いずれ、どうでもよくなる。それより、時間がないから本題だ。」

「あーまだ聞きたい」とあんだぞー。」

「これ、欲しくないか?」

後藤がタケルの声を無視してそう言つた瞬間、ゲーム内の地面にアイルのようなアイコンをしたものが現れた。

「知つての通り、それはパソコン用の実行ファイルだ。…君たちなら…」

そう言つた直後、後藤は画面からスッと消えていた。

「あー待てーどここつたんだよおいー。」

辺りを見渡しながら探しまわるタケルのキャラクターを余所目に、コウトが落ちているファイルを拾う。

「ホントにいたよ…後藤さん。」

「なんだよつたぐー人を呼び出しどいて、しかもあんな強いヤツと戦わせて、きっとあれもアイツの仕業だと想うけど。自分の言つたことだけ言つて変なファイル置いていきやがった。」

次第に冷静さを取り戻してきたタケルに、コウトが話を続ける。

「なあ。これ実行するとた、本当に冥界に行けると思うか?」

「いや、いやいやいや、それはなーって。アイツも言つてたじゅん、面白半分で書いたつて。」

「だよな、ちよつと残念。でもこれ、何が起るんだりつ。以外と重要な機密情報とか書いてあつたりしてな。」

「なんでそんなの俺らに渡すんだっての。あーあ、疲れた！もう寝るー。コウト、解散！」

「だな、さすがに俺もバハムーティアとの一戦は疲れた。じゃ、また明日なタケル。このファイル、『ジー』とつてメールしつくから。」

「別に興味ないけど…一応よろしく。じゃーな。」

そう言つとタケルはメニューを表示し、ログアウトのアイコンを選択してゲームを終了した。

ユウトに言つた通り疲れていたため、すぐに床に就いたタケルだが、今日起きたあの出来事を振り返るうちに、静かな興奮が生まれて中々寝付けづにいた。が、そのうち眠気が気持ちを上回り、タケルは静かに寝息を立てはじめた。

第2章 その？～はじまり～

ファイナルウェポンでの不思議な出来事から一夜明けた朝。部屋には心地いい太陽の光がカーテン越しに程良く差し込んでいる。

その光と、下の階からうすらと聞こえてくる声に促されるよつこ、タケルはゆっくりと目を覚ます。

「…………ル…ケル！…タケル！寝てるの…？遅刻するわよ…！」

「…………うん…。あれ…？今何時だ？…………おー！もうこんな時間…？」

昨日のことでも疲れていたのか、遅刻ギリギリの時間に起きてしまったタケルは、早々と身支度を済ませ、食事もとらずに玄関を飛び出して行くのであった。

「ほらーー！後1分で遅刻だぞーー！走れーー！」

学校の校門では、遅刻しそうな生徒たちを大音量で急かす体育教師の声が響いている。

家から全速力で走ってきたタケルは、ギリギリで遅刻を免れて無事に校門を通過し、そのままの勢いで教室へ飛び込む。

「ハア、ハア、間に合つた…おはよー。」

「おはよー」「遅かつたね」「もうすすぐ先生くるぞー」

「あれ? ゴウトは?」

「いや、まだ来てないけど。」

「そつか。(きつとあいつも寝坊したんだな)」

タケルはそう思いながらいそと席に着いた。

そして朝礼がはじまる時間、いつものように先生が入ってくる。

生徒が各席に戻り、先生との挨拶を交わそうと待ち構えている雰囲気の中、先生から発せられたのは挨拶ではなく、意外な話であった。

「みんなに、話がある。今朝…シバサキ君のお母さんから学校に連絡があり…シバサキ君が、昨日の夜から突然居なくなつたらしい…。」

「はー?」

先生のその話にクラス全体が声にならない驚きで静まり返った中、タケルだけがとっさに声を張り上げた。しかし動搖のせいか、タケルもその先の言葉が浮かばない。さらに先生が話を続ける。

「夜までは部屋に居たそつだが、朝には居なくなつていたそつだ。今、先生たちや、警察にも届け出て捜索中だ。」

「(いなくなつた? 夜は俺とファイナルウェポンして……。!?)
まさか…あのファイル、実行したつてのか!? でも、あれはアイツ
が面白半分でつて……いや、行方不明事件は実際に起きてたんだ

し……マジでか……？」「

「誰か、何か心当たりのある者はいないか？何でもいい。どんな些細な事でもいいから先生に教えてほしい。」

そんな突然の話に、冷静に頭を働かせられる生徒はおらず、皆一様に驚きのあまり黙り込むだけだった。

タケルは、親友が行方不明という状況と、昨日のニュースで書っていた“行方不明後に誰も見つかっていない”という言葉が脳裏をよぎり、少しうつむき加減で不安を隠し切れない表情をしていた。その表情に田がとまつたのか、先生が声をかける。

「タケル、どうした？顔色が悪いぞ？何か知っているのか？」

「……いや、あの…ユウトが居なくなつたって聞いて…それで…」

「そうか……お前らは仲が良かつたからな…。気分が優れないなら、少し保健室で休んできてもいいぞ。大丈夫だ。先生たちや警察が必要見つけ出すから。心配するな。」

「…はい。」

「一人で行けるか？」

「…はい、大丈夫です。」

そう言つてタケルは、皆が心配そうに見守るなか教室を後にした。

「（なんか上手い事抜け出せたけど……とりあえず、あのファイルを実行してみるか。）」

教室を出たタケルが向かつた先は保健室ではなく、パソコンルーム。顔色が悪かったのも、感情が顔に出やすい体质なだけで、その状況から先生が勝手に気分を悪くしていると判断してくれたようだ。

パソコンルームに入つて部屋の電気をつけ、早速適当なパソコンを立ち上げる。

そして、コウトが昨日の別れ際に書いた言葉を信じ、ファイルが来ている事を願つてウェブメールを開く。

「さすがコウト。」

メールはちゃんと届いていたようで、"logotousan.exe" ファイルも添付されている。さうしてコウトからのメッセージも。

“さつきはお疲れ。マジで驚きだな。とりあえずファイル送つとくから。それと、やつぱ気になるから、このファイル、今から実行してみるわ。もし明日俺が居なくなつてたら……なんてなw。”

「なんだよ……マジでいなくなつてんじゃんか……つていうかコウト、やっぱり、このファイル実行して居なくなつたのかな……なんだよ……このファイル……。」

パソコンのディスプレイを眺めたまま、不安に駆られてしばらく直するタケルだったが、コウトが居なくなつた真相を探るため、意を決したかのような堅い表情へと変わっていく。

「とにかく……これを、実行するしかなさそうだな……。」

そう頼む、"go to OSAN.exe"を実行した。

……

しかし、画面が一瞬黒くなつただけでまた元の画面に戻り、それからは何の変化もない。

「?…何も起きない……。…って、まさか……、あんの野郎!—」

そう言つて何かに気づいたのだろうか、少し動搖した動きでパソコンの横に掛けてあつたヘッドセットマイクを取つて装着し、ゆっくりと後ろを振り返る。

「マジで、勘弁してよ……ホントに出でくるのかよ……!……“い、後頭さん……後頭さん……わ、私を!…冥界へ……つ、連れて行つて……トセイ!—”」

そう呟えた瞬間だった。

いきなりパソコンの電源が落ち、ディスプレイが真つ暗になつたかと思うと今度は部屋の電気も消え、黒いカーテンに遮られた薄暗い太陽の光のせいで不気味な部屋へと変貌させる。

「え、え?マジで?マジで!—?なに!—?」

その状況にあわてふためくタケル。

そして少しのあいだ静寂が続き、辺りが確認出来るくらい部屋の暗さに目が慣れてきた時だった。

今度は低音で震える様な音とパチパチと何かが弾ける様な音がかすかに聞こえてくる。その音は決して大きな音量ではないが、徐々にボリュームを上げて音の震えも激しくなつていてるようだ。

タケルは完全におびえ切つて声が出せない。

その状況をまるで楽しんでいるかのように、人の恐怖心をあおる絶妙な間をとりながら異変は続く。

次に起きたのは、いよいよと思わせる様な非現実的な現象。タケルと背後のディスプレイを中心に、周囲の空間が歪み始める。それはまるで、その場を水の球体が包み込んでいるような状態で、半径1メートルから外が歪んで見えていた。

その時だった。

「…………？」

タケルの目の前にある席迎いのパソコンディスプレイに何かが映っている。それに気づいたタケルが体を強張らせて声にならない絶叫を上げた。

そこに映っていたのは、背後のパソコン画面からタケルの頭目掛け伸びてきている血色の悪い灰色の手。その手はゆっくりと近づいているようだつたが、それに気づいて反射的に逃げようとしたタケルの後頭部をいきなり猛スピードで掴み、今度はパソコン画面にゆっくりと、確実に戻つていく。

その手を必死に振りほどこうとしたタケルだが、手に触った瞬間の生々しい弾力と冷たさに完全に心が折れてしまい、力を入れられないままゆっくりとディスプレイの中へと引きづり込まれていく。

「（じ）れ……マジで洒落になんないって……。コウト、ごめん……。

マイ…………。（）」

極限の心理状態の中、ユウトやマイの事が頭に浮かんでは必至に意識を保とうと抵抗していたタケルだったが、その思い虚しく、ゆっくりと意識は遠のいていき、プツリと、なくなった。

第2章 その？ ↗新世界↗

心地よい温かさが体を包み込み、時折感じる柔らかな風が目覚めを促す。

そして力強い滝の音が、意識を呼び覚ます。

جامعة ريلاس ٢٠١

意識を取り戻したタケルは、ディスプレイに頭がめり込んだ辺りで途切れた記憶からの、この急な情景変化に戸惑いながらすぐに周囲を見渡す。

そこは、生い茂る木々に囲まれた自然美あふれる森の中。

木々の間から漏れる温かな陽の光が体を照らし、時折柔らかな風が吹いてはタケルを煽ぐ。

感じる。

「…………森！？これ…………冥界じゃないよな、どう見ても。どうなんだ
ううっ…………つていうか…………想像してたど！」じゃなくて…………良かつたー

先程の絶望的な恐怖から解放されたとてつもない安堵の気持ちに、心地よい森林という状況があいまつてか、タケルは大きな背伸びと共に大声で叫んだ。

その解放感もつかの間、
上げた自分の左腕に違和感を覚え、手をおろして腕を見てみる。

「うお！なんだこれ……バングル？」

違和感の正体は、左手首に纏わりつゝにはめられていた5cmほどのバングル。それは金属製のようだったが、手首にフィットするような不思議な装着感のある素材で出来ており、色は白色。手側と体側の両端少し手前にはシルバーの細いラインが腕を一周する様に走っており、表側と脈側の中心の2か所には、暗いエメラルド色をした1mm程の幅の細い溝が、直径5mmほどの円を描くよう装飾されている。

「これ……色とか形が少し違うけど……もしかしてファイナルウェポンの……あのバングル？」

そう呟きながら、ゆっくりとそのバングルを触った直後だった。脈側のエメラルドの円が光り初め、その溝からは1本のエメラルド色の線が何もない空間に照射されたかと思うと、まるで絵を描くような動きをし始め、瞬く間に30cm四方の半透明なディスプレイをそこに作り出した。

「すげー！！立体ディスプレイだ……やっぱそうだーこれ、ファイナルウェポンの……ってことはここ、ファイナルウェポンの中！？なんだよこの映画みたいな展開！！」

描かれたディスプレイをキラキラの田で見つめながらはしゃぐタケル。

ファンタジー映画を見ては密かに憧れていた、突然不思議な世界に放り込まれるという状況に、自分が置かれているという事を確信して興奮しているようだった。しかしそれも長くは続かなかつた。矢継ぎ早に頭に浮かびあがる疑問が興奮を冷静へと引きもどしていく。

「つていうかこの画面……なんで全部英語なんだよ…そりゃぱりだつての。ファイナルウェポンのメニュー画面とまつたく違うし。それにこの雰囲気、ゲームつてこいつよりはまるで現実と同じだつての…」

…。

タケルはそう言いながら、左手の甲を抓つたり、地面の土や落ち葉を握つてみたり木を触つたりしてみた。

「うん。ちゃんと痛いし、土も木も普通な感じ……なんなんだつてのー!!……。でもまあ、良かつた。きっとコウトモこの世界に居るはず。冥界じゃないなら、生きててもいるよな。」

その時だった。

森の奥の方から木の枝がいくつも折れる音と、木々が揺れて葉っぱがこすれ合う音が聞こえてくる。その音は徐々に近づいてきているようで、タケルは驚いてその方向に目をやつた。

その先には、大きな動く影が見え隠れしている。

「……え?……マジ…ですか…?」

その影のシルエットを見ていち早く直感したタケルがそう呟くと、木漏れ日が一瞬だけその影を照らし、姿をさらけ出した。

見えたのは、牛の頭をした巨大な人型の怪物。

「へ、うそだろ……やつぱーい……、ファイナルウェポンかよー!…」

姿を叩きしたことによる恐怖と驚きで思わず語尾を張り上げてしまい、それに反応したかのように突然、巨体は歩く速度を増して木々をなぎ倒しながら近づいてくる。

「なんで、ミノタウルスがいるんだよ…………逃げなきゃ…………逃げなきゃつ……！」

恐怖ですくむ体に鞭を打つかのような大声でそう叫ぶと同時に、タルは全速力で森林の道に沿つて走りだした。

それに気づいたミノタウルスは歩くのをやめ、獲物を追いつめるか
のような勢いで走り始める。

大きな地響きをさせながら徐々に距離を縮めてくる音にさらなる恐怖を覚え、タケルは大声で叫んだが、もう真後ろまで来ているのではないかと思わせるくらいの振動が伝わってきたその時、ふと、一緒にについてきている立体ディスプレイに田をやつた。

その先には、剣のような形をしたアイコンが。

それをとっさに右手で触ると、リストのような画面が開かれ、そこには一つだけ“Short Sword”と表示されている。

意識はすでに逃げる事で精いっぱいのはずだったが、幼いころからゲームで遊んでいたタケルは、条件反射だったのか、無意識でそれを選択した。

その瞬間、右手が光り始める。

その光の中からは剣の握りが現れ、とつさにそれを握りしめると、続けて鎧^{よは}と刀身が現れる。

その現象にやつと意識が追いついたのか、タケルが右手の剣を見つめて呟く。

「ショート……ソード！？ 戦えってのか！？」

ミノタウルスはその間も徐々に迫ってきており、右手にお約束の巨大な斧を構えて、タケルを両断しようと間合いを詰めてきていた。

「いやいやいや無理っしょ！…あればゲームでこれはリアルだつての……！」

全速力で森の道を駆け抜けるタケルだったが、歩幅の差でついには追いつかれ、ミノタウルスはタケルを間合いに捉えると、斧を振りかぶり、タケルを殺めんと渾身の力で振り下ろす。

その刹那、背後からせまる斧は完全に死角となっていたにも関わらず、なぜか斧の動きを感じ取っていたタケルは、とつさに急ブレーキをかけると同時に後ろを振り向き、今までの速力を踏ん張る足に溜め込み、力の反動を利用してミノタウルスの左脇へと飛びこむ。

そしてすれ違ひざまに右手のショートソードを、森林が震えるほど

の絶叫を上げながら思い切り振りぬく。

振りぬかれたショートソードは、少しの抵抗があつたもののミノタウルスの胴体を通り過ぎ、その後、ミノタウルスの巨体は腹から二分され、走ってきた勢いとともに少し先の地面へと激突する。

その振動が小さくなるとともに、辺りはまた最初のころのように静まり返った。

「ハア…ハア…やつた…のか…。これは、ミノタウルス…間違いない…ここは、ファイナルウェポンだ！」

第2章 その？～世界の秘密と力の存在～

突然放り込まれた世界は、現実となんら変わりのない世界。太陽の光、そよぐ風、流れる水、広い大地に生い茂る木々や野草。呼吸ができ、走ると疲れ、痛みも感じる。

ただ、決定的に違う部分があつた。それは、左腕にはめられたバングルと右手に持つた剣。そして、胴体が一分されて転がっている怪物。

その異物たちを繰り返し見ながらタケルは呟く。

「ここ、絶対ファイナルウェポンだよな…。どんな仕組みか全然わからんけど、あのファイルで連れてこられたんだきっと…。」

心臓の鼓動は先程よりは遅くなつてきたりが、それでも普通じゃない早さで脈打つ音が聞こえてくる。

しばらく黙り込んでその鼓動を落ち着かせながら異物たちを眺めていたが、そのうち怪物が青白く光り始める。

ゲーム同様に光を放ちながら散つていいくのだろうと思つたタケルはその現象を見つめていたが、その予想と反して怪物の巨体には縦横に計4本の青いラインが現れた。

いつもと違つ現象に一瞬戸惑つたが好奇心からかじつと見つめていると、10本22本と増えて格子状の模様が出来上がり、今度はひかれているラインが各々光り始めると、できた格子状の1マス1マスがランダムに次々と引っ込み始める。

怪物の体はどんどんどんどん小さく削られていき、最後には跡形もなくその場から消えた。

「見事だな。」

突然、後方から聞き覚えのある声が聞こえ、タケルは勢いよく振り返る。

「さすがはタケルくん。君ならそれくらいやつてのけると思つていたよ。」

「ゴト――――――」

いつか後藤が現れるのではないかと何となくだつたが予想していたタケルは、後藤の登場に驚くのではなく、今までの事柄から一気に頭に血を上らせて鋭い剣幕で呼び叫んだ。

「ハハ、今度は呼び捨てか。だが、それも無理はない。突然の出来事で驚いただろ？　すまなかつた。」

「……」

後藤が素直に謝ったことに意表をつかれたのか、先程までの勢いは半減して押し黙る。

また、後藤がどこか悲しげな表情をしているように見えたのもそうなつた理由であった。

「ちなみに、ファイナルウェポンでのバハムーティアは私だつたが、今のミノタウルスは私ではないからな。これがこの世界での必然だ。

「

「『』は…何なんだよ。」

相変わらずの激しい剣幕だったが、冷静な口調で質問をした。

「『』の世界は、ファイナルウェポン・ザ・ネクスト…。今開発中の次世代バージョンのファイナルウェポン。『』ではなく、まったく別次元の作品だ。」

「ファイナルウェポンザ…ネクスト…？」

「そうだ。ファイナルウェポンの世界をベースに実際に人間が入り込んでプレイする事ができるまったく新しい本当の体感ゲーム。」

「『』って、やっぱりゲームの世界だったのか。でも、どういう仕組みなんだよ。」

「それは企業秘密ってやつだ。それに、言つても理解はできないだるわ。」

「悪かつたな！頭が悪くて！」

「いや、そういう次元の話ではないんだが…まあいいや。といひでタケルくん。『』は何しに来たんだ？」

その問いかけに、一瞬そう話している当人のせいでここにいるんだろうと思つたタケルは睨みつけようとしたが、すぐさまそれが諭されていいると感じ取り、本来の目的を思い出す。

「……コウトー。」

「行かなくていいのか？彼は今、君の助けを求めているはずだ。」

「どうにこむかわかるのか！？」

「少し、バンブルを見せてくれないか。」

そう言われて素直に左腕を前に出すと、後藤は言つた通りバンブルを少しだけ触つた。

「…何かしたのか？」

「ディスプレイを出してみるとこい。答えはそこに書いてある。」

タケルが最初に開いたときと同じようにバンブルに触ると、空間にはディスプレイが現れる。

「…日本語になってる…」

「ランゲージ設定を変えておいた。これで画面を理解出来るだろ？。そこにマップがある。それを開けばコウトくんの居場所が表示される。」

そう聞くと、言葉を返すのも忘れてすぐにマップを開く。

「！」の光ってる青い丸のところか！？」

「やつだ。」

「じゃあこの赤が俺の居場所かな……。そうなると……」ソリモではもう遠くなさそうに見えるけど……」

「普通に走つてここから約10分ぐらいいの距離だ。」

「10分か、ちょっと遠いな…。」

「しかし今のタケルくんなら5分ぐらいで着くだろうな。」

「…？ 何で時間が縮まるんだよ。」

「さつき、死に物狂いでミノタウルスから逃げていただろ。」

「見てたんなら助けるー。」

その言葉には答えず話を続ける後藤。

「ここはファイナルウェポンをベースにした世界。あれだけ死力を振り絞つて逃げてたら、何が起こる?」

ことファイナルウェポンに関しては感が鋭くなるタケルは、その質問の答えが分かったのか、表情が明るくなるとともに眼の色がキラキラと輝き始める。

「まさか……熟練度が上がる…?」

「さすがはタケルくん、察しがいいな。その通りだ。この世界でも経験を積むことで基本能力は上がっていく。と言つても、先程の移動距離の極端な短縮は死という危機感の表れが招いた急速な熟練度アップで、実際はよほどの経験を積む必要があるがな。」

そんな話を聞いているのか聞いていないのか、タケルは目を輝かせたままニヤけた顔で太ももをさすっている。

「…まあいい、早く行つてあげるといい。」

「よつしゃ―――待つてろコウトー今行くぜ―――！」

ハイテンションで雄たけびをあげると、後藤に何の言葉もかけず、一目散でコウトの方向へと走っていく。

一人残された後藤。

「本当に、元気のいいまっすぐな子たちだ。……すまないな……君たちにこんな重荷を背負わせてしまって……」

すでに見えなくなつていたが、タケルの向かった方を見つめて悲哀に満ちた表情でそう呟くと、体が徐々に透明になつていき、静かにその場から消えていった。

第2章 その？～世界の秘密と力の存在～（後書き）

今回ちょっと短かったです m(— —)m
次のも含わせてアップするつもりだったのですが、ちょっと展開を
練り直しておりまして…。
ほぼ出来てますんで近々アップします。

あと、そろそろ何かいい…反応…とかね、あると嬉しいなあ～
なんて…ハハハハ。
ま、書くの好きなんでPV1でもあればモチベーション落とさないように
書けるんですけど w w
暇があったらぜひ宜しくお願いします m(— —)m。

オンラインアクションRPG「ファイナルウェポン」とは？（前編）

構成をミスつて説明が必要になってしまったので、ついでだからファイナルウェポンとは何ぞや？といつて説明をいろいろ入れときたいと思います。

オンラインアクションRPG「ファイナルウェポン」とは？

Final Weapon
ファイナルウェポン

ジャンル：オンライン・アクションロール扮演游戏（MMO・ARPG）

プレイ料金：アイテム課金制（本体は無料ダウンロードできる）

ゲーム世界観：

さまざまな世界が混ざり合つた独特な世界を冒險する。
中世ヨーロッパ・中華・古い日本・秘境・現代・近未来などの世界
が大陸ごとに分かれて点在している。

ゲームシステム：

ステータス

ヒットポイント

1・HP…キャラクターの命を表すバロメーター。これがなくなる
と死亡する。死亡した場合ペナルティが存在し、一定確率で装備品
が破壊される。

2・SP…スタミナポイント

魔法や技などのアビリティを使用するのに消費するバロ
メーター。歩いたり何か行動したりするだけでも微量だが減つてい
く。自然回復する。

3・物理攻撃力…剣や斧などの物理的な攻撃の力を表す。高いほど
与えるダメージが大きくなる。

4・特殊力…魔法や技アビリティなどの威力を表す。高いほど「え
るダメージや回復アビリティ使用時の回復量が大きくなる。

5・防御力：敵の攻撃を受けた時の耐久力を表す。高いほど受けるダメージが小さくなる。

6・回避力：敵の攻撃を受けた時の耐久力を表す。高いほど受けるダメージが小さくなる。

7・運…敵が落とすアイテムのレア度やゴールドの量を左右する。高いほどレアなアイテムを落としたり高額な「ゴールド」を落としたりする。また敵に隙ができる確率にも影響する。

8・熟練度：下記にて説明。

成長システム

ファイナルウェポンにはレベルという概念がなく、その変わりに身体熟練度というものが存在し、身体の各部位ごと（頭・体・腕・脚の4つ）にそれらが設定されている。

熟練度の上げ方は、敵と戦うことで各部位を使用したり、アビリティを使用することで上がったりする。脚の熟練度は移動だけでも上がる。

熟練度には経験値が存在し、一定の経験値がたまつたら熟練度がアップする仕組みになっている。

（チート行為にはペナルティが課せられる）

熟練度があがると、攻撃力や防御力などのステータスが上がったり、より強い装備品を装備できるようになったり、強力な魔法や技などのアビリティ使えるようになる。

1・頭の熟練度：頭部装備に関わる。魔法アビリティ・技アビリティに関わる。

数値が高いと、より強い装備が可能となる。高度な技や魔法が使えるようになる。

2・腕の熟練度…武器や腕防具の装備に関わる。また全身を覆う鎧の装備にも関わる。魔法アビリティ・技アビリティに関わる。数値が高いと、より強い装備が可能となる。高度な技や魔法が使えるようになる。

3・体の熟練度…鎧装備や持ち物を入れるアイテム袋の数に関わる。魔法アビリティ・技アビリティに関わる。

数値が高いと、より強い装備が可能となる。持物を多く持てる。高度な技や魔法が使えるようになる。

4・脚の熟練度…移動速度の上昇や脚装備に関わる。魔法アビリティ・技アビリティに関わる。

数値が高いと、より強い装備が可能となる。移動速度があがる。高度な技や魔法が使えるようになる。

技や魔法などのアビリティ取得について

技や魔法、オートアビリティなどは装備品から取得する。

優れた装備品には自動的にアビリティが付与される。それは精製の前段階で知る事ができる。

武器や防具を装備した時点でそのアビリティは使用できるようになる。

ただし、アビリティの使用にも熟練度が関わってくるため、使うためには設定された熟練度を超えていないと使用できない。また、武具の装備をはずすとそのアビリティは使えなくなる。

ただし、その装備品を装備したまま戦闘を繰り返すと、アビリティ経験値が蓄積されていき、それが満タンになると装備品から引きはがして自分のものとして所有することができる。（引きはがされる

と装備品のアビリティはなくなり、装備品を他者に譲り渡しても使えなくなっている。)

装備品精製システム

自分が「デザインした武器・防具などの装備品をゲーム内に自由に反映させることができる。

装備品の精製方法は以下の通り。

? 紙に書いた元デザイン画をグローブタイプの専用コントローラについたカメラで読み取る。

読み取られたデザインはどんな形であっても、自動的に整形はされるも、ほぼ忠実にゲーム内に表示される。（ただし、卑猥な物など公序良俗に明らかに反する形のものがとりこまれた場合は、ユーザにペナルティが課せられる。また銃は存在しないため、ただの攻撃装備系に割り当たられる。）

また、カラーの場合はその色が反映され、モノクロの場合は後から色付けが出来るようになっている。

? 装備品がゲーム内に表示されると同時に、それを精製するのに必要な素材が決定される。

素材は以下の5つのジャンルに分けられて割り振られる。

1 . 主素材：装備品の重要な部分に使用される。剣なら刀身部分。鎧ならそのものの材質。

2 . 副素材：装備品の装飾部分などに使用される。剣なら鍔や握り部分。鎧なら主素材を固定する骨組み部分など。

3 . 色素材：装備品に指定の色をつけるために使用される。

4 . 強化素材：装備品を強化するために使用される。

5 . 属性素材：装備品に属性を付与するために使用される。

6 . 特殊素材：特殊な変化をもたらしたり、アビリティを意図的

に付与したりするために使用する。

必要な素材は各ジャンルごとに一つづつとは限られておらず、強そうなものは主素材が5つ以上必要だったりと変動する。ただし、主素材と副素材がそろつていればほぼ作成が可能である。また1~6まで全て揃っていないと精製できない装備品も存在する。

?精製に必要な素材が揃つていればすぐに精製が可能。ただし、強力であればあるほど精製に時間要する。また元デザイン画の出来栄えによっても精製時間は変動する。

作成した装備品は自分で装備するのはもちろん、ゲーム内で商店を開いて販売してもよい。

その時の販売価格はシステム側からあらゆる情報を元に計算され、変動式で決定される。

ファイナルウェポンはアイテム課金制のため、その装備品を買った場合には実際のお金が必要となるが、売れた場合はその売値の10%が制作したコーナーに還元される仕組みになっている。（人気の秘密はその部分にあるようだ。）

オンラインアクションRPG「ファイナルウェポン」とは？（後書き）

以上、とりあえず物語に必要な部分は全て説明したつもりのファイナルウェポン解説でした。

第2章 その？～激闘の果てに語りたる真実～（前書き）

今回、長文です（^-^;）

第2章 その？～激闘の果てに語られる真実～

マップが示している青い丸へ急いで向かうタケル。

「ハハ！ほんとだー。さつきより全然軽い！！」

ミノタウルスに追いかけられた時よりも体が軽くなつた感覚を味わいながら、曲がりくねつた険しい森の道を縫うように走り抜け。そして1分ほどで森の外へと抜け出たが、その途端に足を止めた。

「…なんだよー!!…。」

そこに広がっていたのは山奥の田舎を思わせる雰囲気の場所で、イネの田植えを終えた水田と車がギリギリで離合できるくらいのアスファルトの道が一本走っている。それはテレビなどで見る現実世界の風景で、ファイナルウェポン上には存在しないものだった。

「……ネクストはこんな世界を冒險するのか？……っていつか今はユウトのところに急がなきやな！」

その景色に少し拍子抜けしたタケルだが、すぐに本来の目的へと頭を切り替え、アスファルトの道にのり森の中では発揮できていなかつた全力の走りを開放させる。

「つおッツー！はえ——————！」

その速度は驚くべき事に100メートル7秒台。2009年以降破られていない短距離世界記録9秒58を優に超えるスピード。

おまけにスタミナも鍛えられていたため速度が落ちる」とはほとんどなく、平均で9秒台を保ち続けた。

そして5分が経過したころ、相変わらずの田舎の情景が繰り返されるその先に見えてきたのは、干からびた田んぼの中で剣を構えるコウト。そしてコウトの周りには背の低い怪物が7匹。まだ遠くからで小さかつたが、そのシルエットでタケルは正体を察していた。

「あれゴブリンか！？ コウト…………タケル様が助けにきたぞ…………！」

その声に気付いたコウトはタケルを見るなり安堵の表情を浮かべ、タケルもまたその表情を見て満面の笑みで返すと、走りながらショートソードを召喚してそのまま突っ込んでいく。

「うおおおおおおおお…………」

先程のミノタウルス戦で見せた弱気な姿勢からは一変、この世界がゲームだとわかったことや熟練度の存在とその実感、そして何より無事に生きていたコウトと再会できたことでその気構えは変わり、勢いを落とすことなくゴブリンに切りかかる。

そのタケルの攻撃で勢いづいたのか、コウトもすかさず攻撃を開始する。

「絶対来るって信じてたぞタケル！……」

「当たり前だつての……！」

タケルは1体目に続き2体目も軽々と倒すと、コウトの所にたどり着いて背中合わせに構えた。

「ミノタウルスに比べれば！全然怖くないっての……」

「ミノタウルス！？そんなのとやり合ってきたのかー…？」

「まあねー。つとー。」

互いに再会を喜びあいながら会話を交わすも、確実にゴブリン討伐していく。

そして最後の一休に一人で切りかかるうとした時、「ゴブリンは後ろを向いて一目散に逃げ出しだが、

二人はそれを追わず、林の中へと消えていく姿を眺めていた。

「ハハ、出直してこいつてのー。」

「タケル、ありがとな。探しに来てくれて。」

「つたぐ、心配させるんじゃないってのー。」

その言葉に優しい笑みで答えるコウト。

「お前が居なくなつたつて、家や学校が大騒ぎだつたぞ。」

「そうなるよな。俺もまさかこつなるなんて思わなかつたよ。でもま、ちよつと期待はあつたんだがな。」

「そのオカルト好きも今回で少しほは懲りたんじゃない？」

「だな。さすがの俺もあれは怖かつた…。」

「でしょーでしょー俺本当に死んだかと思つたつてのー」

「ハハ、俺が怖かつたんだからタケルなら死にかけたろうな。見た
かつたぜその顔。」

二人は少し目を潤ませながら大声で笑つた。

「そりいえばタケル。ここにきてゴトウさんと会つたか？」

「ああ、さつき会つてきたぜ。コウトの居場所はアイツに聞いたん
だよ。それと、ここがファイナルウェポンの次回作つていうのも」

「……その話だけど、信じられるか？」

「いや…正直まだ半信半疑つてとこ。確かにこのバングル。剣。怪
物。そして熟練度。どれもファイナルウェポンと同じだけど…。」

「俺も、ここは本当にゲームの世界なかつて……。これだけの証
拠があるのに疑うのもどうかと思うけど、ゲームにしちゃ凄すぎる
よな。」

コウトはそう言つと、倒れている6体のゴブリンを見渡した。

するとミノタウルスと同様に倒れたゴブリン達に青いラインが現れ、
削られるように消えていく。しかし、6体のうち3体が装備してい
たそれぞれのナイフや片足のみの革靴1個にはそれが現れず、その
ままその場に残つていた。

「ん、なんだ？」

不思議に思つたタケルはそり言つて1本のナイフを拾い上げた瞬間、

左腕のバンブルが光だし、脈側のエメラルドの円からそのナイフに向けて光が照射されたかと思うと、倒した敵と同じようにナイフにも青い格子状の模様が描かれ、細かい立方体にバラバラになつていいながらバンブルへと吸い込まれていく。その流れを驚いた表情で見つめるタケル。

「『コトウさん』に聞かなかつたのか？それは戦利品。」

「マジで！？」

その言葉にピコンと来たタケルが急にテンションを上げてコウトに聞き返した。

「敵を倒したときに身体から離れてる装備品はそうやつて残つて、それを拾い上げると自動的にバンブルが解析を始めて取り込む仕組みらしい。」

「へーー！あ、ほんとだ！」画面に出てる。鉄10個に皮2枚か！」

「『ゴブリンのナイフ』だつたらそんくらいだな。」

「つてことは、『』でも武器とか作れるのかー？」

そう聞き返しながらタケルのテンションは更に上がつていき、落ちている残り2本のナイフと革靴を興奮しながら拾い集めた。

その姿を笑いながら見ていたユウトは、右手に持っていた自分の剣をタケルに見せる。

「ほら。」

「あー・シヨートソーデじやない！」

「さつさつ作つてみた。タケルの『ザイン』には劣るがな。」

「すげー……ますます楽しくなつてきた……あ、でも何でそんなこと知つてんだ？」

「あのなあさつさつと『コトウさん』に聞かなかつたのかつて。俺がここにきたの、9時間も前だぞ。『コトウさん』に色々と教えてもらつたし、自分で試す時間もあつたんだよ。」

「そつか。よし！俺も何か作つてみよつと…」

タケルはコウトの話をさうと聞き流すと、早速バングルからディスプレイを呼び出してメニューを開く。

「で…どうするの？」

この世界での精製方法を知らないタケルはコウトに助言を求め、武器精製を開始する。

「なるほど、これでペンが出てくるのか。」

表示されているボタンアイコンにタッチすると、バンブルから光が照射されて空間にディスプレイと同じ色のペンが現れる。

「すげー……まんまファイナルウェポンだな…。」

教わっていたコウトをそつちのけで一人咳きながら作業を進めるタ

ケル。

ユウトはそれを呆れ気味ながら優しく見守っている。

タケルは早速、まつ毛がになつたディスプレイにペンを走らせた。

「うお、何だこの描きやすわー。紙に描いてる感覚と同じだつてのー！」

すいすいらとペンを走らせるその顔は真剣そのもので、タケルの周りには少し張りつめた空氣すら感じとれる。

そしていつもながらの速さで描き終えると、早速 コンバイル 変換操作を行つたが、それを見守っていたユウトが突然ニヤリと笑つ。

「ん？ ビーツしたんだよユウト。ニヤニヤ笑つて。」

「見てればわかるよ。後何分だ？」

「10秒」

「早ー何でそんなに早いんだよー！」

ユウトが納得いかない様子でタケルにツツコんだその時だつた。

バンブル上側のHメラルドの円からは懐中電灯のように逆円錐の光が現れ、タケルの描いた劍が空間に投影される。

「つヤマジで！ 立体で確認できるのー？」

「な、すげーだろ？ ネクストだと変換の時点^{コンバイル}で立体化されるんだと。…にしても、やっぱ流石だな。」

現れた剣は、コウトの身の丈より少し高い全長170cmぐらいの片刃の大剣で、切つ先はカッターのような形をしており、刃側はそのまま真っ直ぐ鍔^{つば}を通り越して握りの最下部まで降りている。そして約2cmほど刃幅を残して鍔へ戻ってきており、手を保護するガードの役割りを担つてしているのが分かる。

鍔そのものは無かつたが、その付近には峰側から刃の手前まで刀身の上から補強するような形で、黒い金属が添えつけられており、その高さは約10cmほど。

握りの部分は黒い革製のようで、一般的な剣とは逆の作りで刃側に差し込まれた形になつていて、

「でもこれ、素材足りてないだろ。」

「やつぱんしつ?」

コウトの指摘で画面を再確認すると、そこには鉄160個、皮20個、黒色剤10個と表示されている。

「うわ、全然足りない……つていうか黒色剤つてどうやって手に入れるんだっての。」

「こきなり強そうな武器は諦めるしかなさそうだな。」

「…仕方ない、違うの描くか…。」

「そんな落ち込むタケルに朗報があるんだが。」

「は?」

「実はもう一つ驚きの機能があつてな、さつき書いた状態のがまだ

「画面に残つてゐるだろ?」

「ああ、あるけど?」

「その画面をタブレットと同じ感覚で摘まむ動作をすると縮小できるんだよな。」

「……それってつまり……！」

「そう、縮小する事で素材を減らすことができる。しかも握りの部分やそのガードの部分は使い勝手が変わらないよつて自動で補正がはいるといつ優れもの。」

「マジで…すげー…さすがネクストって言つだけの事はあるつての！」

「まあ当然威力は落ちるけどな。」

「じゃあ早速、こいつを小さくすると……」

無邪氣に浮かれた声でさう言つて画面を操作すると、今度は^{コンパイル}変換を行ずして投影されている剣の形が変化していく。

「つかおーすげーッ！」

変更された素材の必要数は、鉄50個、皮10個、黒色剤1個と表示されている。

「だいぶ減つたな。皮はクリアしたから、さつきの弱つちいゴブリンを倒してナイフを数本頂けば作れそうだなつと。ちょっと不恰好に

なつたけど…………あ、そつか。だからコウトの剣もちょっと可笑しかったんだ。」

「これは素だ……。」

「あ……。」

タケルの失言にちょっと悲しくなるコウトだったが、タケルに対するレクチャーは続く。

「それとせりにも一つ。これは俺が試してみて分かったことだが、相手を倒さなくともその身体から離れた物は全て解析・取り込みが出来るみたいだ。」

「なるほど、奪い取るつてのも有りなわけだ。」

「そう言つことだな。ただ、手に触れた瞬間解析を始めてしまつから奪つたものをそのまま使つるのは無理なようだ。」

「そつか。俺は自分の『ザインした装備品しか付けたくないから別にいいけど。』

「以上が、精製の基本ってところだな。」

「ありがとうコウト先生！」

「どういたしました。じゃ、今度は俺の番な。楽しくなってきた所悪いんだが、この世界きてからもう結構立つし、一回帰りたいんだけどいいか。」

「えー、もう帰るの？これからって時によつて『冗談』ここに来たのもコウトを連れ戻しにきたんだからな。」

「悪いな。ゲームなんだしまだ来れるだろきっと。で、帰り方はどうするんだ？」

「…………え？」

「あれ…………マジか？ゴトウさんに聞いてきたんじゃないの？」

「いや……ハハ、コウトが危ないって言つから飛んできりやつて……。あ、ほら、呼べばポロッと出でくるんじゃない？」

「…………だつたら俺、既にここに居ないんだけどな…………」

「…………ハハ、そりや、ヤバイなつと…………」「…………ゴトウわああ～～～ん！――！」

晴天に向けられたタケルの情けない叫びが響くも周囲に変化は無く、氣まずい雰囲気が一人を包む。

その時だった。

一人のバングルが突然赤く変色し、淡い光を放ちながらゆっくりと点灯し始める。

「コウト、何これ？」

「俺も、知らない。」

「何か雰囲気的にヤバイ感じしない?」

「ああ、するな…。」

そう言つて周囲を警戒するように見渡すと、タケルが前方の空間に半透明をした細い線が4本引かれているのに気づく。それは縦線3メートル程度が2本づつ、横線5メートル程度が2本づつ。

「ユウトー…あれ、何だろ?」

「…わからない。でもなんか、構えた方が良さそうだよな。」

ユウトの提案で二人とも身構えて剣を握りしめ、その方向を注視する。

その後空間のラインは高速で増えていき瞬く間に網目状になつたかと思つと、今度はその中心から人型をしたもののが歩いて出てくるような動きで網目が盛り上がり、出てきた網目のマスは一定距離で青白い光を放つて色や形を変えていく。

現れたそれは、人間のようなシルエットで細身ながらも筋肉質な体格をしており、170cmほどの身長に全身暗い紺色のウェットスーツのようなものを身にまとい、肘・膝には金属製と思われる道具、手や足・頭部には近未来を感じさせるデザインのこちらも金属製と思われるグローブ、ブーツ、マスクをはめており、赤く光った眼でタケル達を見ている。

「ファイルウェポンにはいないヤツだな…ネクストの新種族かな、あいつ。」

「さつきから悪いがさっぱりわからない…。でもあれが敵なら一体

だし、なんとかなりそうじゃないか？」

ユウトがそう言つた直後、まだ消えてはいなかつた先程の空間から同じように、左側に2体、右側に2体の計4体、今度はステッジが黒色をした人型が現れ、後ろの空間は消失した。

「ユウト…今の聞こえてたんじやない？」

「ハハ、なんてこつた…数的に不利になつたがどうするタケル？」

「どうするつても、得たいが知れないしなあ…かといって何もな
い所から現れたつてことは…逃げてもムダっぽくない？」

「確かに…」

そう話し合つていた最中さなかだつた。真ん中の**人型**の目が鋭く発光した瞬間、明らかに敵意を向けて左右の4体がタケル達の方に突っ込んでくる。

「…きたぞタケル！」

「くそ！あいつらやっぱ敵か！？ユウト、右の2体を頼む！俺は左
！」

「了解！」

向かつてくる人型に対し、普段からファイナルウェポンを遊び倒していた二人は、複数戦でも物怖じせずに立ち向かっていく。

やがて左側の2体がタケルの間合いで接近、そのうちの1体がそ

のままタケルに殴りかかってきた。

その攻撃速度はなぜかタケルには遅く感じ、樂々と右にかわす。そして遅れて正面から近づいてくるもう1体の方に目を向けて袈裟斬りを放つも、左手の平で受け止められると同時に剣を握り締めて引き寄せながら腹部目掛けて腰の入った右ストレーントを打つてく。タケルは一瞬体制を崩しながらもそれをギリギリでかわし、そのまま咄嗟とっさに右足で突き放すように蹴りを放つと見事に敵の腹部を捉えて深くめり込み、その後敵は体を浮かせて吹っ飛んでいく。その距離実に3メートル強。さらに地面へと叩きつけられた後も1メートルほど滑つていく。

「なんだ、今の…。」

少し離れて交戦中だつたユウトが吹っ飛んでいく様を目撃してそう呟くと、同じく他の敵3体も手を止めて吹っ飛ばされた敵の方を向き、驚きのあまり全員がしばらく硬直する。

しかし、一番驚いていたのは当人であるタケルだつた。

「ハハ…何これ…今のも脚の熟練度の力？…すげえ…スゲエエ
――――――！」

タケルの叫び声で全員ハッとするように我にかえり、硬直がとけて再び戦闘が始まると、真っ先に動いたタケルはすかさず後ろにいたもう1体を左足で蹴り飛ばす。

その敵は1体目同様に吹っ飛んでいき、その後2体はピクリとも動かずに青い線が現れて消えていった。

倒した事を確認したタケルはユウトの方に目をやつたが、ユウト側はまだ戦闘中、というよりも硬直状態が続いていた。

2体を正面に見据え、静かに正眼の構えを取つてゐるユウト。

タケルの時とは違ひジリジリと間合いを詰めるように迫る敵2体だつたが、業を煮やしたかのように1体目がユウトに襲い掛かると、それにつられたかのように2体目も続く。

それは刹那だつた。

一気に間合いを詰めてきた1体目が左ストレートを放つてきた瞬間ユウトは一足飛びで右斜め後ろに下がり、着地と同時に剣を切りあげて敵の左腕を切り落したかと思うと、そこから流れるように銅を払い抜ける。そしてその動作の終わり際の隙をつくよし、「前に出てきたユウトに合わせてもう1体が回し蹴りを放ってきたが、しゃがみながらそれをかわすとそのまま回転して剣を斜め上に切りあげて敵を切り裂いた。

倒れた2体にも青いラインが現れて消えていく。

「…………すげえ。ユウトってあんなに強かつたっけ？」

それを一部始終見ていたタケルは驚きのあまりそう咳き、ユウトに駆け寄つていく。

「すげえなユウトー、あんな動き部活でも見た事なかつたってのー！」

「そりゃそうだ。ここに来てないとあんなの絶対無理だつて。」

「そつか！ユウトも熟練度上げてたんだな！」

「ああ。……つて、話してる場合じゃなかつたな。アイツ、さつきよ
り田の色強く光つてないか？」

「……確かに。でもこれで2対1。他のヤツらも大したことなかつた

し、問題ないんじゃない？」

「よし。じゃあさつれと近づけて、あの腕を手に入れるとするか。」

先ほど切り落とした腕の方をみながらコウトはそう言った。

「うわ……コウト、結構残酷だな……。」

「そりゃ？新しい敵に遭遇すれば落とす素材が気になるからついな。それに所詮はゲーム。血だつて出てるわけじゃないし。」

「や、そりこいつもん？」

「……きたぞタケル。」

今までの様子をずっと静観していた紺色の一人が、歩いて近づいてくる。

その動きを注視しながら一人は左右に離れて行き、挟み打つような陣形を取る。

先程のヤツらとは少し違う雰囲気と、漂う異様な空気を感じとついてくる。いたのか、タケルはぐくりと唾を飲み込んだ。その刹那。

「……消えた！？」

「隣だタケル！」

それは一瞬だった。敵は目の前から消えると共にいつの間にか二人の間に立っていた。タケルには消えて見えたようだったが、動体視力の熟練度の違いからかコウトはその動きを田で追う事が出来、正

面を向いたままのタケルにそれを知らせるとともに咄嗟に敵に切りかかる。

しかし敵はコウトの攻撃を見ることなく剣を手で止めるとそのまま軽々とへし折り、折った剣先をタケルへと投げつけた。

「ツツツ———！」

投げられた剣は右肩に突き刺さり、その激痛でタケルは苦悶の叫びをあげてその場に倒れ込んだ。

突き刺された所からは、真っ赤な血が流れ出てきている。

「タケル———！」

「（ツツだよこれ！超痛え——！血！？）」、ゲームだろ！？）

痛みによる苦しみの中、タケルの頭に駆け巡る疑問。しかしそれもつかの間、しかめて瞑つていた両目の片方を開くと、その眼に飛び込んできたのは信じられない光景。

敵に腹部を貫かれているコウトの姿…。

「（……）」

タケルは一瞬何が起きているのか理解できなかつた。コウトの折れた剣は敵の左肩に当たつているようだがそこに傷は無く、その剣を構えたままの体制で貫かれて動かなくなつていてるコウトが見える。しかし次第にその状況を脳が理解し始め、ある感情が身体を支配する。

恐怖。

肩の痛み、流れ出る血、目の前のあり得ない光景、そして親友の絶望的な姿。それは普通の人間、さらにはまだ幼い中学生には想像を絶する恐怖を生み出す。

身体が震えだし、右肩の痛みを忘れたかのように無意識にそこから後ずさりを始める。

「（何だよこれ……逃げなきや……逃げなきや殺される……殺されるー。）」

死の危険を感じ、タケルが無意識に取った行動は震える身体を必死に動かしながら後ずさりして逃げること。その情けのない姿を、腕を腹から引き抜いた敵がゅっくりと振り返り、特に動く様子もなくただじつと見つめている。

ゅっくりと、ゅっくりと後ろに下がっていくタケルだったがその途中、肩から流れでる血でまみれた右手に何かが当たる。それはユウトの側にあつたはずの切り落とされた敵の腕。本来ならば真っ先に喜んで解析し取り込みを行うタケルだったが、近くにあつた不自然さや触れたことで付着した血が余計に不気味に見え、今は恐怖を煽る材料でしかなかつた。

しかしその時だった。

タケルの手に触れた直後にバンブルが反応し、自動で解析が始まつたかと思うと瞬く間に完了。付着した血ごとバラバラの立方体になつて取りこまれていく。

そして画面には、腕に装備されていた金属製のグローブのものであらう“鉄50個”と、聞いた事もない素材“クロロプレンゴム30

個”。そして“「強化素材」”と補足が添えられたこちらもきいた事がない素材“立方晶室化ホウ素（りっぽうしじょうしつかほうそ）10個”と“属性素材”と補足された“白血球5個”が表示されている。

ファイナルウェポンでは見た事のないそれらの素材名を曰にしたタケルは、全身を支配していた恐怖心を強い好奇心が押し黙らせて行くを感じ、自分の世界へと没入していく。そしてメニュー画面を開き、登録しておいたガードのついた剣の縮小タイプを選択して作成可能になつてているのを確認すると、コウトの剣が折られた事や効いていなかつた事などを思い返しながら先程の強化素材と属性素材を全てつぎ込んで実体化を開始する。

実体化まであと1分。

その動きを不審に思ったのか、今までその様子を傍観していた敵がゆっくりと近づいてくる。

タケルに生まれた好奇心は静かな興奮へと変わり、それはやがて怒りへと転換されていく。

その怒りは完全に恐怖を制し、身体の震えを止めてタケルを立ち上がらせた。

「…よくもコウトを…」

抑えきれないくらいに膨れ上がった怒りを少し放送出するかのように静かな口調でそう発すると、今にも落としてしまいそうな右手の剣を左手に持ち替えて握りしめる。するとちょうど時間が来たのか、剣が光り始めて握りの部分から変化していく。

その現象に何かを感じたのか、敵の赤い眼が強く発光したかと思うとその姿は消え、突然タケルの目の前へと現れる。

しかしその動きを読んでいたかのようにタケルは、出来上がりていた剣をすでに敵めがけて振りおろしていた。完璧なタイミングの不意打ちとも言えるその動きにも敵は反応し、特に脅威と感じていなぞふりで右手を軽く上げて止めようとする。

「……S……i t……！」

しかし、敵が一瞬何かの言葉を発すると同時にその剣は右手を砕きながら突き進み、そのまま身体をも砕いて突き抜けた。そしてその部分から一分された上半身が滑るように地面へと落ちるとその衝撃で粉々に砕け、下半身も後ろに倒れて砕け散った。

「……コウト……コウト……！」

タケルはそう叫びながらすぐにコウトへと駆け寄っていく。痛々しい姿で倒れているコウト。ピクリとも動かず呼吸もしてない。その姿を目の当たりにした途端にまた恐怖が体を襲うも、懸命に呼び掛けるタケル。

「……コウト……コウト……しっかりしろよー、ゲームなんだから死ぬわけないっての……早く目を覚ませよ……！」

その呼びかけもむなしく、コウトからの反応はない。

「何とかしろよ……何とかしろよ、コト――――――！」

自分ではどうじよつもない状況に、ふと頭に浮かんだのは後藤。後

藤ならこの状況を何とかできるのではと、今までの流れを思い返した上で出た当然の叫びだった。

しかしその時だった。

突然マップ画面が開いたかと思つとそこには、二人の居場所を示す赤と青の丸に向かつて猛スピードで近づいてくる黒い点が表示されていた。

タケルは驚きと共にすぐにその方角へ目をやると、震える体を押さえこんで立ち上がり、左手の剣を構える。すると遠くの方の空に何かが動いているのが見えてきた。それは大きな白い羽根を羽ばたかせて近づいてくる人型の何か。

恐怖のあまり体は震えたままだつたが、その異形から敵であると確信したタケルは必死に身構える。

「また…敵なのかよ……一もつ俺は、ゴウトを見捨てない！」

ゴウトが敵にやられた時に恐怖で後ずさつてしまつた事を後悔しているのか、気合を入れるようにタケルは唇を噛みしめた。

徐々に近づいてくる何か。そしてついにその姿が確認できる距離まで近づいてきた時、それを見たタケルが咳く。

「…………人間！？」

それは怪物や先程の敵とは完全に非なるもの、黒髪のショートヘアをした女性、人間だった。

白い羽を広げたその女は、タケル達から少し離れたところへと降下

して来る。そして広げていたはずの羽根はキラキラと輝きを放ちながら消えていき、着地と同時にタケル達の元へと足早に歩いてくる。

「誰だよお前……」

その姿を見ても恐怖からか警戒を解く事が出来ず、タケルは震える体のままその女を威圧する。

「どきなさい！邪魔よ。」

しかし女は怯むことなく厳しくも冷静な言葉をタケルに言い放ち、それに圧倒されたのか、または人間の言葉を聞いて少し落ち着きを取り戻したのか、タケルは口を閉じて呆然とした。そんなタケルを素通りしてコウトに駆け寄る女。

「……何すんだよ！」

「ここの子を助けたいなら少し黙つてなさい！」

「……助けてくれるのか……？」

コウトの側にしゃがみこんだ女はタケルのその言葉に返答しなかつたが、左腕にはめたバンブルからディスプレイを表示してメニュー画面を開くと、手慣れた手つきで何やら操作し始めた。それを後ろから見ていたタケルは画面構成が自分たちとまったく異なっている事に気づき、また言語が英語であつたために何をしているのかさっぱり分からなかつたが、藁にもすがる思いだつたため女の言葉を信じ、その場にへたれこんで静かに動向を見守る事にした。

「酷い……何でこんなことに……。」

女は真剣な眼差しでユウトを見ながら「ディスプレイに表示されたものを作業していく。

「（人体構成解析・止血及び血液生産プログラム投与…）」

するとバングルの脈側からは戦利品を解析すると同じ光が放たれ、ユウトの傷口に照射される。そして小さな機械音になると共にその光が今度は淡い赤色に変わつていく。

「（解析完了ね……細胞活性化プログラムに修復プログラム……実行）」

赤い光が傷口を照射し始めて約3分が経過したころだった。流れていた血はゆっくりと止まり、真っ青だったユウトの体が赤みを帯びていく。そして今度は痛ましい傷口が青く光り始めると、白い光を放つ極少の立方体が次から次へと現れては色や形を変えていき、どんどん傷口が塞がっていく。そして約30分が経過し、最後の傷が完全になくなつた時だった。

「ガハツ！－ゲホ！」

ユウトは息を吹き返した。

「ユウト……ユウト…………」

その瞬間、タケルは抑えていた涙を一気に放出して泣きながらユウトへと駆け寄つていく。

「ハアハア……タケル？俺……」

そう言つてまだうつろな眼をしているコウトはゆっくつと自分の腹を見て触つて確認する。

「あなたも、その右肩を治してあげるから、見せなさい。」

女は優しくやう言つと、泣きじやくるタケルの右肩も同じように修復していく。

タケルの治療が続く中、自分の腹を確かめながら今までの経緯を整理したユウトは突然眼を見まされたかのように両目を見開き、声をあげる。

「…？俺、どうなったんだ！？アイツは…！？」

「グス……アイツは、あそこで粉々になってるよ…。」

タケルはその粉々になつて散らばっている紺色の敵を指さした。

「（…！あれは！？）あなた達、あれを倒したの！？」

今度はそれを見た女が突然声を上げてタケル達に問いかけた。

「…！」人は？

「そうだった！この人がユウトを助けてくれたんだぞ！…本当に…！ありがとうござります！！」

タケルはさきほど憔悴しきつて涙で皺くぢやになつた顔立ちから一気に生氣を取り戻した様子で、涙を拭いながら元気よく女に礼を

述べた。

「ナウだつたんですか！？ ありがとナウ。死んで、死んだとゆつた…。」

「いいわよお礼なんて。一いつちで戦闘が起きてるのを知つて駆け付けてみればあの状況だもの。助けるのは当たり前よ。それに、あなた達に死ななくて助かつたのはどうやら私の方みたい。」

「…？」

「あれを倒したの、あなた達よね？」

「倒したのは、ユウヒチのタケルです。」

「俺、サトウタケルです！」一いつはシバサキコウトー最初、あいつの他に黒いヤツが4体いて、それを一人で倒したんです。そしてあいつを倒そうとしたんですが、めりやくめりやく強くて、それで氣づいたらコウトがあんな風に…。」

「黒いのが…4体…。」

「俺、すっげえ怖くて…怖くて、逃げだそとしてた時に、コウトが切り落としてた黒いヤツの腕が近くにあって、それをバンブルに吸収してこれを作つて…そしたら何とか倒せたんです。」

タケルは自分の剣を前に出した。

「タケルそれ、作れたんだな。」

「ああ。お前が切り落とした腕がなぜか近くにあって。それを取
りこんだら金属グローブで鉄が補充でき、おまけに強化素材なん
かも手に入っちゃったから、無我夢中で全部混ぜちゃつたっての。
あ、そういうや俺の血も混じつたみたい。“白血球”とか表示されて
たし。」

「白血球…？ちょっとその剣見せてもらつていい？」

その言葉に反応した女が急にタケルに話しかけた。

「いいですけど…」

女は剣を受け取ると、バングルから光を照射して調べ始める。

「どうしたんだろうな。」

コウトが小声でタケルに話しかけて続ける。

「こ…しても、蹴つといてよかつたぜあの腕。」

「…あれコウトがやつたの…？マジド…」

「ああ。あいつに攻撃される直前にタケルの方に蹴飛ばしといたんだ。ほら、おれの剣軽く折られただろ？その事が気になつて、もしかしたら何か役立つかもつてな。」

「このやうーーーーーですがコウト…………お前つてヤツはどこま
で冷静なんだよ…………お前のおかげだ、こいつして一人生きてられる
のは。それに比べて俺…一度逃げようとしたんだ…。『めん、コウ
ト…。』

「気にすんなつて。結果オーライだろ？それに、実際アイツを倒したのはお前だからな。大した奴だよ。」

自分の過ちを全て洗い流すかのようなコウトの優しい笑顔に、タケルは眼をつむませながら嬉しそうに笑って応えた。

「なあユウト。俺、ものすごく気になる事があるんだけど……。」

「それ……多分俺が思ってるのと同じだと思うが……この世界のことだろ？」

「うん。あの痛みは……本物だった。血も……。」

「俺も痛みを通り越して意識が遠のいていくのを感じたよ……まるで眠るよ！」

少し難しい顔で一人が会話していると、剣を調べ終わった女が話しかけてくる。

「剣、ありがとうございます。返すわね。」

「あの、どうかしたんですか？」

タケルは剣を受け取ると不思議そうに尋ねた。

「ええ。とても嬉しい情報だったわ。あなた達のおかげで、真っ暗だった道に少しの光が見えてきた。」

「どうこう、ことですか？」

理解できない女の言葉にコウトが問いかけた。

「白血球よ。まさかそんな使い方が出来るなんて思わなかつたわ。人間の血を取りこむなんてね。」

「血……。あの、この世界つてゲームなんですよね？」

何かを知つていそうな口ぶりで語る女に対し、タケルは疑問に思つていた事を質問してみた。

「ゲーム?……あなた達、もしかして何も知らないでここにいるの!？」

「そこまでだミレイ。後は私から話す。」

突然背後から声が聞こえ、振り返るとそこには後藤が立つっていた。

「…ゴトウさん!？」

その声に真っ先に反応したのはミレイと呼ばれた女。タケル達が後藤の声に驚いて振り返り声をかけようとするも、激しい剣幕で後藤に話しかけるミレイの言葉に遮られる。

「あなたは!まだこんな事をやつてるんですか!？」

「ミレイ…仕方がなかつたんだ…。この子達はまだ若すぎる。しかし其の潜在能力は私の予想を遥かに超えている。現にその結果を先程見せてくれた。この世界に順応させるには、この子たちの思い描く世界で成長を促す他なかつた…。」

「でも……！」

さらに激しい剣幕で後藤を問い合わせようとしたミレイだが、そこにタケルが大声で割つて入る。

לען ראלטנשטיין

タケルの声に皆が驚き、辺りが静まり返る。

「コウト……死ぬとこだつたんだぞ……俺も、肩に剣が刺さつて！血が出て！怖くて……！親友を置いて逃げようとした……！お前にこの気持ちが、分かるか――――――――――――――！」

やはり、コウトに許されるもあの時の自分の行動が許せていなかつたタケルは、後藤にあたるべきことではないと知りつつも、やり場のない怒りを後藤へと向けて叫んだ。

そこに、ユウトが割つて入る。

「ゴトウさん……」は、一体何なんですか！？このコアル過ぎる感じ、激痛や血…ゲームであるはずがない！！！」

普段目にすることのないタケルの悔しそうな顔を見たせいか、ユウトが珍しく熱く声を張り上げ、後藤を問い詰めた。

しばらく静寂が続いた後、後藤が静かに口を開く。

「ここは、USAネットワーク……。アメリカが開発した……シェルターだ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2557v/>

GOTOUSAN!!（ゴトウサン!!）

2011年10月9日13時26分発行